万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十三巻　第八号（通巻二七二号）

万象

BANSYO

十一月号

2024.11

十一月の句

北大クラーク館

金色のサリーに散れり楡の雪

松原智津子

北海道の初雪は11月に見られます。

エルム（楡）の園・北海道大学の広大な敷地内にあるクラーク学生会館の前の初冬の景であろう。

インドからの留学生はコートも着ず輝くサリーにはかすかな雪が。母国の冬とは大きく違う自然の中で、金色のサリーを靡かせる女性は雪を愛おしむのだろうか。

旧帝大に学ぶエキゾチックな女性と共に、溶ける雪の持つ空気感や衣に溶ける雪の滲み、楡大樹の逞しさまで、映像が一瞬に浮かびます。

我が師の句集『金の針』より、美意識を感じた一句でした。

（太田佳美）

令和六年
十一月号

万象

BANSYO

人は愛するに足り
真心は信ずるに足る。

中村　哲

万　象

令和6年11月号

名誉主宰作品　虫の夜……内海　良太　4
主宰作品　夕野分……江見　悦子　5

風音集Ⅰ・Ⅱ……6
小林　愛子
中村　千久・福島せいぎ・柳澤　宗正・曽根　満
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中　愛子
榎本　文代・神田美穂子・井村　和子・前田貴美子

風音散歩㉔（十一月号）……小林　愛子　10
万象の窓㉜　辞書と歳時記……江見　悦子　11

同人作品　江見悦子　選……12

同人会だより
第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集……沢辺たけし　32
9月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく㊹……33
同人作品の佳句……江見　悦子　34
令和六年「万象」新同人発表……万象俳句会　36

同人特別作品
晩夏光……濵谷　和代　40
藍甕……光岡れい子　41

特別作品評（九月号）……下嶽　孝一　42

北から南から　八海山の火渡り式（新潟）……髙橋　ひろ　43
佐野昴句会に江見主宰をお迎えして（栃木）……芝宮留美子　44
続・風のしをり⑪　子規の俳句鑑賞（七）　林　徹……編　集　部　46
万葉の抒情⑮『万葉集』にたずねる抒情の源流⑮……橋本　清　47
江見悦子自選句鑑賞⑭　富士の水引く外流し花梨の実……亀田やす子　48
雪渓の中より榛の花上ぐる……木内　マヤ　48
第9回いわき海の俳句全国大会（報告）……成瀬真紀子　49
万象ノオト「掃　除」……辺野喜宝来・土門　一・渡部　洋子
入河　大・入山　繁幸・鈴木　裕一　50

万象作品　江見悦子・内海良太　共選……52

俳句カレンダー掲載句自註〈越後線頭上を過ぎぬ竹瓮舟〉……髙橋　ひろ　63
万象作品の佳句……内海　良太　64
新中央句会報（8月例会）……66
ルビーの小函（十一月号）……編集部・校正担当　69
東西南北……70
令和六年度 全国俳句大会　作品集……〈1〉～〈31〉

〈表紙イラスト〉永井もりいち

虫の夜

内海良太
（名誉主宰）

牛小屋に届く土用の塩袋

炎天に尖つてゐたる牛の尻

震度三の揺れにも慣れて金魚玉

卓上に昭和史上下麦茶冷ゆ

鮎釣の釣果に触れず帰りけり

水神の祠に喜雨の水溜り

虫の夜や虚実半ばを五七五に

夕野分

江見悦子（主宰）

あぶれ蚊や俳誌の山のくづれより

赤黄のおしろいとりわけ黄の匂ふ

毬栗や土蔵に小さき明り取り　一茶生家　二句

栗実る一茶の終の土蔵かな

田を統ぶる黒姫山や稲つるび

しじみ蝶薄荷の花を離れずに

ナウマン象滅びし湖や夕野分

秋草

小林愛子
（名誉顧問）

雲の峰からだ拾はぬ服を着て

幽霊図痩躯の人の後ろより

秋草をざつくり摘んで綾子の忌

森という大きな楽器秋の蟬

死者に捧ぐ一束ねなる吾亦紅

鷹の羽の薄とどきて月まつる

嘗て原田しず枝さんと糸魚川に遊ぶ

断層の裾にヒスイや紅葉川

青海波　中村千久（編集人）

垂直の巨船の舳先海霧分くる
新涼の白磁の皿を拭き上げし
秋海棠見つけし今日は子規忌なる
秋刀魚置く皿に広ごる青海波
奔放に真夜を飛び交ふいなつるび
秋彼岸作務衣の尼の網代笠

ヒロシマ　福島せいぎ（顧問）

ヒロシマの空より蟻が翅落す
流れ着く軽石拾ふ敗戦日
みほとけに苧殻の箸と蓮の皿
星合の沖に漁火またたきぬ
阿波人になれず手をあげ踊るなり
灯を入れて西瓜提灯笑ひたる

風は秋　柳澤宗正（顧問）

小窓より厨へ通ふ風は秋
水喧嘩鳩もするなり水飲み場
舫ひ舟きしむ波止場や鯊光る
運上所跡は県庁ちちろ鳴く
掃部山万灯点し虫を聞く
ゴム長を干しある畑秋あかね

雪の声　曽根満（同人会会長）

立冬や三和土の隅の火消壺
湖の村小春の風に包まるる
七五三ここは頼朝旗揚げ地
大焚火朴の一葉を足せばなほ
冬月や杣家に洩るる機の音
中学生一人の村へ雪の声

夜の秋

松原智津子（北海道）

伸び伸びの芝生に大の字夏真昼
この夏のおしやれ着始末古着市
夜の臥所日向の匂ひ夏布団
終演のチェロの余韻や夜の秋
新涼やマニキュアの色銀鼠に

矢筈薄

亀田やす子（栃木）

日に三度御膳を供ふ盆供養
足腰の話あれこれ鰻食ふ
辿り着く色なき風の遊水池
堰にきて音なく溜る虚栗
陣屋跡矢筈薄をまぶしめり

地虫鳴く

沢辺たけし（千葉）

ガラスペンにインクの螺旋涼新た
砂を撒き登る機関車秋つばめ
利根川の黒く横たふ星月夜
短きは別れの言葉地虫鳴く
逆さまに流れてゆけり茄子の馬

断腸花

吉中愛子（東京）

大木が痩せ木に凭れ夏果つる
鶏頭の種水盤の満面に
悼 石川矢さま 二句
逝くも一人送るも一人断腸花
爽やかや棺にペンと紙一枚
小鳥来る欅は枝を密に張り

ひぐらし

榎本文代（神奈川）

踏切の音を遠くに盆の月
秋風や紙で束ねし巫女の髪
遅れ来てせはしかりけり秋扇
ひぐらしや厚く切りたる練羊羹
秋蝶の黄に大空の青さかな

初鵙

神田美穂子（静岡）

オーブンのチーズぷつぷつ朝曇
線状降水帯御山洗となりにけり
西瓜買ふ撫でて叩いて抱き上げて
一菜で済す昼餉や法師蟬
初鵙の声青空に刺りけり

沙羅の花

井村和子（石川）

そば殻の枕親しき盆の家
古九谷のみどりの余韻夜の新樹
師の純子忌逝きて十年一日沙羅の花
夕焼へ球児の叫び吸はれたり
秋遍路長命杉を撫で行けり

あまたの星

前田貴美子（沖縄）

少年は酸つぱし朝の青蜥蜴
恐竜に会ひにゆく朝草ひばり
恐竜の爪の漆黒いなつるび
億年の地球の傷や銀河濃し
恐竜の卵あまたの星流れ

風音散歩㉔（十一月号）

小林愛子

線状降水帯御山洗となりにけり　神田美穂子

線状降水帯という言葉が一般化したのは２０１０年代後半という。句は霊山である富士山御山洗の雨が線状降水帯であったのだ。ゲリラ豪雨に比べて範囲、時間共に激烈を極める。富士山は古来霊山として登拝されたが、現在は状況が変わり、映像で見る限り溢れる人人である。登山者によって汚された富士山がこの雨で洗い清められると言い伝えられている。句は「線状降水帯」を上五に据え一気に読み下す。５文字10音。他の表現法もあろうが、作者はあえてこれを選んだのだと思う。人智を越えた地球の変化を凝視する姿である。

そば殻の枕親しき盆の家　井村和子

一読して懐しさに溢れる句である。新しいそば殻を入れた枕は優しい香りで軽く、寝返ると空気を含んだそば殻がさらさらと音を立てて体に馴染み、熱を取る。まさに頭寒足熱である。筆者もこの枕で夢を結びながら子供時代を過ごした。欠点は詰め物の劣化が早い事だが、昭和初期の庶民の平均的生活であったと思う。いまや贅沢品でさえある。

盆の家では父母が揃っていたのであろうか。手擦れの調度品、傷の机、ましてそば殻の枕に人生の哀歓が一気に高まる。

少年は酸つぱし朝の青蜥蜴　前田貴美子

「少年」とは？　遠い少年は美しく、例えば興福寺の阿修羅立像に、恋に似た胸騒ぎを覚えるようにスクリーンの上の少年に心酔する。身近な現実の少年は美しさ、狡さ、人間の持つ様様な面をみせるが、総じて純粋でひたむきである。大人になる前の束の間のこの時期がいとほしい。句の「酸つぱし」は感覚である。また「朝の青蜥蜴」は所を得ている。朝の光りを返しながら好奇心の塊として命を輝かす。

逝くも一人送るも一人断腸花　吉中愛子

「悼　石川矢さま二句」の前書きのあるうちの一句である。石川矢様は「風」時代からの同志、一人逝くのは運命としても、「送るも一人」に胸を突かれた。「断腸花」の、特に字面が悲しみを増幅する。またの名を秋海棠といい古くから親しまれている植物、芭蕉も元禄４年48歳で、膳所の菅沼曲水の庵で詠んでいる。

秋海棠西瓜の色に咲きにけり　芭蕉

新涼やマニキュアの色銀鼠に　松原智津子

秋になってから立つ涼気である。俳諧では「涼し」と言えば夏、それは最も涼しさを願い扇の風や水音などの些細な涼味が快いから。「新涼」は肌をさらさらと過ぎる心地よい風である。「めっきり涼しくなりましたね」の挨拶が交されるのもこの頃で、作者はマニキュアの色を銀鼠に代えた。銀・白銀は涼しい色、秋の更衣に合わせたのである。

万象の窓㉜

辞書と歳時記

江　見　悦　子

今回から、選句の舞台裏をご紹介します。

ご承知のように、会員は毎月15日迄に担当の成瀬真紀子さんまで作品5句を、同人は榎本文代さんまで作品10句を投句することになっています。江見のところへは、整理を済ませたそれぞれの全作品、二千句を超えるでしょうか、月の下旬に届きます。昨今の通信事情で投句作品が遅れることもあり、会員の場合は次号掲載に、同人の場合はやり取りの上、最終的にはファックスを使う場面も。成瀬さんも榎本さんも、投句がまだの方には電話を掛けて事情をお聞きしたりと、こまやかな対応をして下さっています。この時期は、宅配便や郵便局との対応で家を空けられません。

さて、辞書と歳時記を卓上にこれからが選句の時間、選者として苦しくも楽しい時間です。目を通すのは今や貴重な自筆原稿。パソコンや携帯で活字を見慣れている身には、毎回とても新鮮です。「字は人を表す」のことわざ通り、書いた方の人となりが伝わってきます。筆記具の違い、字の濃淡、升目の中の字の大きさ、楷書か崩し字か、等等。北海道から沖縄まで、季節の進みの異なる作品を読み進めます。達筆ではなくとも丁寧に書かれた句稿は気持が良いものです。

「万象」では、辞書は『広辞苑』を、歳時記は新しく刊行されたものを、と推奨しています。歳時記と言っても初心者用の簡便なものから、カラー写真が多く掲載されているものまで様様あり、句会に持っていけるハンディーなものと、自宅用のものと、使い分けている方もあるでしょう。現在、歳時記で定評のあるものに、２０２２年刊行の『新版　角川俳句大歳時記』全五巻があります。また２０１８年刊行の「俳句歳時記第五版」全５巻は文庫本サイズで吟行の時などに便利。歳時記は多く季語の解説と例句から成り立っています。できれば季語の本意・本情に触れている考証があるものが望ましいと思います。

私が愛用している電子辞書には、２０１３年版の「角川俳句大歳時記」と、２０１８年版の『広辞苑　第七版』が入っています。最終的には前述の『新版　角川俳句大歳時記』で確認しています。

同人作品

江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

花びらをきちんと畳み木槿ちる　札幌　岡本敬子
夏潮を見下ろす崖の古祠
山なかの墓苑はいつも霧こめて
冷やかや番屋の土間の大竈
やん衆のふしど三段秋没日

○ひとゆらぎして花合歓の町暮るる　札幌　林陽子
湖一面紫陽花いろに大花火
百幹の樅の揺らぎや蟬時雨
葉隠れに梅の実ひとつ残りけり
海霧の中行けど行けども石狩野

海づたひ虎杖茂る廃線路　札幌　落合裕子
軽鳧の子の一羽は群になじめずに
鳴き声の主はこの中夏柳
揚花火やがて煙き夜風かな
夜の静寂窓の下より虫の声

大花火終の火の粉は闇に散る　札幌　濵谷和代

○古時計の振子の止る溽暑かな
つくばひをあふるるほどの白雨かな
潮騒や蝦夷萱草の大湿原
海見ゆる外人墓地や晩夏光
札幌　大内和憲

蕎麦の花空のはたてに雲急ぐ
月見草影をゆらして開きけり
皂莢の坂を園児ののび縮み
Jアラート昼寝の底を破りをり
秋天につぶてのごとき戦闘機
札幌　紅露恵子

白鷺や河口濁れる石狩川
朝蟬の松の林をふくらませ
全身を踊らする木木青嵐
背負ふものそれぞれなれど蝸牛
青年の美しき指黒日傘
札幌　大内マキ子

秋暑し力失せたる山の肌
黒南風や祠に揺るる千羽鶴
山羊の声風に細りて吾亦紅
手の届きさうな浮雲林檎捥ぐ
秋声や土器の継目にある時空
札幌　中鉢弘一

○風化せし石像の面晩夏光
霊場の門狭きほど濃紫陽花
雨後の砂掃き出す蟻の小さき塚
保育所のとまと園児の数ほどに
紫蘇の実の母の料理の香りして
札幌　北浦詩子

蒸風や文字の薄るる水みくじ
公園のベンチの木の香夕立あと
○置き去りの焜炉デッキに夏館
口数の減りし少年夏の果
名月やリュックひとつで浄土へと
江別　佐藤哲

秋涼し蝦夷地の奥の朝まだき
はまなすの咲きつぐ浜辺沖ぐもり
山のダム底まで秋の日の届く
どんぶりに桑いちご摘む媼かな
天日干しの餅草にほふ筵かな

江別　太田佳美

不器用な婿のもてなし土用鰻
電柱の影に佇む炎暑かな
祖母の剝く水蜜桃は里の香よ
緑蔭に三人乗りのベビーカー
油照昼の挨拶おざなりに

新潟　髙橋ひろ

句誌を先づ並べ揃へて盆用意
浪寄する音のみ秋の夜の海
平服の禰宜も加り盆踊
ゆつたりと始るおけさ踊りかな
踊子がアリヤサと囃し佐渡おけさ

新潟　髙野松風

梅雨の川浮き沈みつつ鯉のぼる
細ねぎを山と盛りたり冷奴
木洩れ日や崩るるもある梅雨茸
地虫鳴く土を寄せたるけふの畝
自転車をからめとりつつ藪枯らし

南魚沼　森山暁湖

夕暮はことに匂へり栗の花
重さうに風に揺れゐる立葵
若葉風ピアノのドの音打つてみる
胃の薬飲みて落ち着く残暑かな
持て成しは座敷へ通る青田風

益子　光岡れい子

○祭果てにはかに増ゆる厨ごと
神輿担ぐ法被の項清清し
向日葵の十本すつくと陶干場
百歳を恙無く過ぎ鰻食ぶ
この池と決めてか夜ごと牛蛙

芳賀　大村かし子

指先の少し強張る今朝の秋
土用雨庭も植木も蘇る
朝風や甘き香りの稲の花
花立てを新しくして盆用意
蟬時雨に背を押さるる千歩かな

宇都宮　阿久津勝利

新聞を丸め打ちたるあまめかな
信濃より甲斐に張り出す雲の峰
渡良瀬川の中洲に鳴ける行行子

マウンドに汗拭く孤独甲子園
朝顔の柄の浴衣や砂被り
栃木　上岡佳子
烏瓜の花開き初む里の暮
夕端居慣ひいつから独りなる
片虹の足元辺り母の家
胸に来てブローチめくや赤とんぼ
手を尺に紐鶏頭の紐二尺
佐野　増田幸子
苔むせる地蔵のつむり赤とんぼ
彫り深き衣紋の坐像夏の果
鐘楼の擬宝珠に残る暑さかな
勅額を掲ぐる寺門夏惜しむ
虫すだく闇の深きや日記書く
佐野　加藤季代
夕風の月下美人や忙中閑
翁句碑へ落款のごと蝸牛
木木渡る風頬を過ぐ秋の声
昼の虫石灯籠に潜みをり
野薊の種痛さうに零れをり
佐野　阿部澄
雨晴れの今朝いつせいに百日紅
菱の花縫ふ短艇の速さかな
十人に分けても余る隼人瓜
リヤカー引く麦藁帽の用務員
議事堂の衛士の不動昼の雷
佐野　芝宮留美子
菱の花小さき光を放ちけり
蘆茂る間に貉藻見つけたり
山内の緑とらふる猪目窓
手の中に種ぱらぱらと紐鶏頭
つややかな橡の実二つ師の持ちて
佐野　島田和枝
青楓声はね返るがんがん井
葭切の声聞くばかり遊水地
祇王寺の茅葺低し苔の花
秋暑し大黒柱の時計鳴る
鰯雲背伸びして拭く窓硝子
佐野　売野緑
初露や抹茶賜はる美術館

日矢射せる新田の庄の稲の波
辿り着く二連の滝の飛沫かな
彩雲の深き水色夏夕べ
山門へ先を行くなり瑠璃蜥蜴

佐野　店網洋子

山城へ登る参道鉄風鈴
山の池へら鮒釣りの檜笠
夏つばめ飛び交ふ空港デッキかな
街路樹の赤ばかりなる百日紅
噴水のしぶきを出たり入つたり

足利　大木茂

松傾ぐ安宅の砂丘風涼し
初秋を跳び投げ走る応援歌
酒を浴び鮑死力の身を反らす
苔厚き寺苑の闇や驟雨来る
お造りに金の箔載せ夏料理

土浦　澤照枝

さきつおや数多の墓に菊供ふ
子供提灯墓に挿し来て送り盆
岸近く水を濁して鰡跳ぬる
○敷藁を足して西瓜の向き替ふる
藤の実の群れてかそけき音のあり

加須　茂木弘子

炎天やむじな藻咲くと研修生
谷川を釣場と分つ菱の花
緋鯉へと注ぐ武尊山の伏流水
九輪草一山どこも水のこゑ
山清水迸る瀬に子らの声

さいたま　山本右近

砂文字のしばらく生きて土用波
○八月を迎ふ昭和の傷深く
ぬるき風ぬるりと網戸ぬけて来し
円卓を廻され祭鰻逃す
降りだしてまだ音持たぬ秋の雨
稜線をうつろふ雲や酔芙蓉

所沢　三好かほる

新しきシャツの横縞パリー祭
柿の葉に空蟬二つぶら下り
庭仕事はじむる前の蚊遣香
孑子や馬穴の底の小宇宙

立秋や雑木林を風ぬけて

所沢　南雲秀子

北軽の峠茶店の冷し麦

北信の湖畔巡れば式部の実

橋涼し瑠璃色深き八ツ場ダム

麺ゆづる厨の窓の油蟬

○オリンピック終れば長き残暑かな

千葉　田中道江

塵のごとき小虫とらふる百合の蘂

風重し台風予報ひもすがら

○倒木の根方しろじろ秋出水

盆波や一夜にたたむ海の家

炎暑かな天と地の間白光し

千葉　松浦陵保

ゆつたりと鳴き砂の浜大西日

終演の花火と共に県民歌

台風過犬吠埼の波飛沫

立秋の朝日に染る槍ヶ岳

氾濫の爪痕最上川に秋

千葉　喜多恭仁子

戻らぬと決めしふる里能登も夏

パリの夏エッフェル塔に五つの輪

朝まだきオペラの如く蟬鳴けり

火照る身の五臓六腑に茗荷汁

神風が吹くと信じた終戦日

千葉　大月玲子

北斎の波へサーファー踊り出る

翡翠色の光を放ち蟬生る

郭公のこだま返しや沼明くる

メダル受く瞳涼しきアスリート

新涼や砂紋に混る貝の青

酒々井　竹澤竹里

噴煙の浅間の山を霧這へり

露の玉信濃の山を映したり

新蕎麦や街道筋の一軒家

金風や石一つ積む道祖神

新生姜裏の鬼門に葉を伸す

佐倉　内海保子

梅干して一気に水を飲み干せり

指さして金魚と心通はする
筑波嶺のゆらゆら揺るる炎暑かな
鳩居堂の匂袋に秋きざす
駆け出して畦行く子らや送り盆

佐倉　大内佐奈枝

日盛の舗道は赤き花ばかり
城涼し礎石集めしひとところ
○御神酒所は翁ばかりや夏羽織
酢にむせぶ食べなれぬもの心太
今朝秋のフランスパンの噛みごたへ

佐倉　三屋英俊

奥付の著者を紙魚喰ふ我鬼忌かな
美濃和紙の懐紙涼しき雪しぼり
膝の灸最後かつかと朱夏の昼
炊立ての米の匂ひや稲の花
傷残る被爆老樹や小鳥来る

佐倉　横川良子

夏惜しむ洗ひ晒しのバスタオル
沼近き牛舎の匂ひつづれさせ
荒物屋定位置に吊る蠅叩
常よりは魴の少なき今朝の秋
秋冷や城の名残りの見張り台

四街道　奥太雅

向日葵の種整然と渦巻けり
三線を復習ふ庭先花芭蕉
脱け殻の脇に果てたる油蟬
そそくさと日向を抜くる青蜥蜴
牛蛙池の汀の震へをり

四街道　塗木翠雲

団扇風背中に貰ふ力士かな
夏祭太鼓の音の変りけり
兄弟の風にふくらむ捕虫網
○原爆忌三吉詩集読み返す
筑波嶺の裾くつきりと秋初め

船橋　山下良江

じりじりと息つぐ間なき夕の蟬
夏草や野良猫歩く塀の上
ぐんぐんと夏草の丈競ひ立つ
朝涼の塀をゆつたり猫の行く
ほろほろと庭石に散るさるすべり

船橋　赤堀洋子

均されし畑に先づ出で滑莧
胡麻の莢太し天辺ちさき花
蟬の殻朝日の透けて薄き影
厄除けてふ大師に榎の実拾ひけり

○神木の裾に吹かるる蟬の殻

船橋　久保村淑子

飴色のひんやりが好き籐寝椅子
大仙人掌花咲くいつも留守の家
包丁の切れ味にぶき残暑かな
秋めくや紫まとふ鴉の子
初秋のアッサムティーを濃く入れて

船橋　片桐帆一

応援の少女汗ばむ薄化粧
声立てず蟬横飛びに尿放つ
盆路を熊除けの鈴腰に下げ
盆休み戸口に反るスニーカー
福砂屋のカステラ嬉し秋初め

船橋　宮本加津代

引き潮の如く止みたる蟬しぐれ
この路地のみな住み替り鳳仙花
浅漬の茄子に食思のもどりけり
病める身にほどよき暗さ星月夜
街路樹の果てたる先の雲の峰

船橋　中嶋久登

雪渓の一滴続く梓川
木綿糸舐めては針へ旱星
原爆忌福竜丸に吾一人
色変へて途切れぬ色や日日花

○囮鮎四万十川の岩潜る

柏　山本とく江

冥界の師も見給ふや揚花火
風雨去り富士くつきりと秋立てり
病む夫の真夜の「お早う」白露降る
翅閉ぢて水辺に集ふ秋の蝶
ゆるやかに夕日を包む蓮の花

柏　内田郁代

赫赫と弾けさうなる梅雨満月
胡瓜刻む音を誉めたる父なりし
葛の花葉陰に香り放ちたり

盆灯籠二つ灯して整へり
雛僧の母親供に盂蘭盆会

流山　穂苅照子

薄紅の雨の過ぎゆく合歓の花
○辛口の言葉さらりとソーダ水
ひんやりと白玉にある水の艶
折紙の裏は色なし原爆忌
月涼しホテルに古びたる聖書
釣銭のちやりんと熱し夏祭

東京　名和政代

川端に鎌とぐ漢秋気澄む
轡取る徒士の茶髪や賀茂祭
泥つきの山芋並ぶ御師の宿
グループの無口になりぬかき氷
頬かすめ肩にとまるや赤蜻蛉

東京　藤田裕子

蚊遣火のひと揺れ誰の訪れか
投函は明日に亀虫居るポスト
夜濯や追善供養帰り来て
朝涼や一番電車の音近く
夏虫のむくろも朝の露天風呂

東京　島野ひさ

百日紅だあれもいない校庭に
人住まぬ庭の奥より虫の声
蟬時雨父の畑の大けやき
昏れ方の風の一吹き秋めけり
秋の朝きれいに剝けるゆで玉子

東京　加賀葉子

線香花火玉の命を競ひ合ひ
ベロ藍の空へ唖蟬だしぬけに
音の無き井守の泡や沼暮るる
線香立ての灰を篩ひて盆用意
煤けきる焙烙皿や魂迎へ

東京　久留島規子

物憂しや大暑の厠磨けども
明けきらぬ森ざわざわと蟬時雨
大夕立去りて夜空に月白し
巴投げ一本決まる熱帯夜
塩飴を一粒ふふむ炎暑かな

本降りの前のひと粒盂蘭盆会　東京　下嶽孝一

行水の赤子うとうと握るゆび

箸置きは九谷や加賀の洗ひ鯉

風に乗る鎮守の森の盆踊

新涼や露天湯独り占めの朝　東京　草間三香子

回廊を拭く雲水の半ズボン

一里塚店先に吊る蠅叩

新盆会甥残したる警察帽

一斉に湧きて蜻蛉の原野かな

廃屋の軒に触るるや百日紅　東京　岡村純子

早朝の紫の風茄子太る

そよ風が音色に変る江戸風鈴

ゆつくりと蓮池わたる雲の影

敷紙に滲む揚げたて茄子の紺

○間を置かず遠雷たちまち滝の雨　東京　桑原優美子

参道に手相見の出る秋日かな

長き夜やエンドロールに傷の雨

灯火親し珈琲の香と文庫本

白雨去る土の匂ひの残りけり

虫時雨ぽつんと自動販売機　東京　三村紀子

警備員一人に一つ浜日傘

モーターの低き唸りや熱帯夜

立ち尽す他に術なし草いきれ

夏草の境界線を飲み込みぬ

鋸を挽く帰省子の腕細きかな　東京　小池清晴

ばたばたと泳ぐ子の足手は母に

声援の止みし静寂に蟬の声

蟻群るる骸を運ぶその速さ

ベランダへ雨の合間の揚羽蝶

炎天下多言語飛び交ふ雷門　武蔵野　砂地宏子

雑踏をふはり蜻蛉のかはしゆく

管理地の看板越ゆる凌霄花

眠られぬ夜の窓辺や稲光

熱放つ道に降りしく虫の声
暮果てし池よりの風秋近し

町田　広瀬俊雄

咲きたれば匂ひゆかしき花常山木（くさぎ）
暑き日の爆音はげし米軍機
○スカイツリーの影ながながと秋の川
目黄不動の風鐸ゆるる秋の風
咲きみちて思ひし色や酔芙蓉

町田　桔梗純

草いきれジャングルジムに人気なく
歯の検診終へて青空長崎忌
川風のひかりの中や塩蜻蛉
盂蘭盆会合唱曲に賢治の詩
電車待つ人包みたり秋夕焼

日野　喜多尾明子

新築の庭ひまはりとすべり台
橋涼み北斗七星ひとつ欠け
○玉虫の六肢をたたみ死の形
喜雨なればしばし眺めむ音聞かむ
夕焼や知足ならざる身を明日へ
雲の湧き雲の崩れて夏逝けり

横浜　西本才子

波除けに鴉群り雲の峰
よろよろと黒猫とほる旱畑
駅前の花壇に来り撒水車
夕の雨蜘蛛の貼りつく厠窓
十一面観音詣で今朝の秋

横浜　大橋雅子

百日紅の並木燃え立つ旧街道
秋暑し五右衛門風呂をでんと据ゑ
てらてらと光る葉の間や白睡蓮
空襲に欠けし狛犬終戦日
昨夜の雨水滴光る青蜜柑

横浜　山崎郁子

無花果の紫甘し裏庭に
梅雨明の農家の庭に草刈鎌
夏霧の姥子の駅に下り立ちし
夏山の草に紛るる石仏
夏の庭雀啄む菓子のくづ

横浜　三木豊子

夕顔や夕さりを待ち風を待ち
茅葺の夏炉を燻し民家園
塗下駄の爪先揃ふ阿波おどり
山鉾の稚児ゆつくりと手を拡げ
ゆるやかに扇子使へり京舞妓

川崎　新妻奎子

明明と灯して夕餉終戦日
干草の匂ひ広り夜の庭
如露ひとつ庭に転る初嵐
○息荒く蹲る猫稲光
教会の十字架青し星月夜

川崎　大久保進

手を引かれ汀の一歩浮輪の子
涼しさの土産を籠に道の駅
上野発急行十和田盆帰省
星今宵災禍を覆ふ闇深し
秋の蚊に付きまとはれて酔ひの息

鎌倉　恒川清爾

一輛車滴る山を登りをり
秋立つや地球儀の青海大き
○神輿舞ふ八百屋駄菓子屋パチンコ屋
灯籠を点して巫女の頬を染め
初蟬や並ぶ野仏顔丸き

横須賀　織田みさゑ

山笑ふ高圧線のうなりたり
山百合の香りほのかに届きけり
おしまひは水中花火手を叩く
夏の草夜明けに光る物ありて
雲厚し音ばかりなる大花火

伊勢原　佐藤和子

そば茶淹れ一人の時間夜の秋
○木槿咲く漢江の水満満と
沢庵の尻尾のおやつ敗戦日
朝顔の夜明けの色にひらきたり
一軒のための木の橋葛の花

静岡　大村峰子

分校のありし昔や合歓の花
回覧板回す色無き風の中
ガラス戸をこつんと塩辛蜻蛉かな

湖に雲の重たし行行子
初秋や竿竹売りの声過ぐる
静岡　海野みち子
新涼や湖は翡翠の水湛へ
○湖風の涼しく抜くる俳句塚
盆花は夫の好みし男郎花
送り火を焚けば煙の寄り来る
麦秋や納屋に手擦れの粉挽き臼
静岡　宮﨑知恵美
赤石岳を覆ふ峰雲荷上げの日
梔子の花の錆色広りぬ
夏の宵雲に日の色残りをり
老鶯の嵐の朝を鳴き通し
向日葵の活けられてなほ陽を追へり
静岡　望月敏男
紫陽花の夜明けの色でありにけり
籐寝椅子足を伸ばしてなほ余り
蜘蛛の囲の糸の光れる多角形
もの言はぬ人体模型夏季講座
教へ子の思はぬ会釈茄子の花
静岡　藤原千代子
髪切つて麦飯食うて暑に耐うる
如露の水浴びて飛び立つばつたの子
緑蔭の椅子へ「風」誌をひと抱へ
無住寺や金魚の群れに迎へられ
吊り下る実のみな小振り秋暑し
静岡　荻野加壽子
海底は太古の無音水くらげ
人波を分つ信号日の盛
灯ともして影の生るる涼しさよ
東京の路線図もつれたる炎暑
光より闇に目の馴れ敗戦忌
静岡　小川明美
丘ひとつ埋めつくすほど百合の花
秋葉祭法堂前の水鉄砲
日傘閉ぢ経蔵廻すをんなかな
富士を背にたかいたかいの浴衣の子
掃苔や母と揃ひのコルセット
静岡　藤本節子
山蟻が道案内や遥拝所

杉落葉踏んで村山行者道

日傘さし日傘の影を踏みゆけり

番号で呼ばるる患者サングラス

どつと吐く樋の芥や大夕立

静岡　大長文昭

開山祭護摩の白煙梢まで

県境を跨ぐ倒木苔の花

母の忌や畝高高と大根蒔く

ゐのこづち午後は眠たき二部授業

産土の千年杉へ青時雨

静岡　加山ひさ子

内股に下る坂道額の花

母よりも父へ長めの苧殻箸

○触れ合はず裏返りたる海月かな

老犬の気怠き眼極暑なる

子と遊び汐の匂ひの髪洗ふ

静岡　石川裕子

苔深き濠の石垣凌霄花

片時もはなさぬ漫画夏休み

語り掛け妣へ真白き花さびた

卓袱台を囲む笑顔や西瓜切る

おやすみと籠のばつたを放ちやり

静岡　本多ひとみ

新藁の束山積みの農具小屋

艶めけり白磁のやうな毒茸

秋風や干されしままの猪の肝

猩猩の木の実離さぬ檻の隅

眼を閉づるライオンの頭に秋の蝶

静岡　杉澤修

涼み台野太き声の蜑の衆

潮入に銀鱗散す海鵜かな

ぶつかつてぶつかつて寄せ土用波

○青芒風のかたちに靡きをり

河童忌や杉の木立の奥の闇

射水　成瀬真紀子

水羊羹銘銘皿に風一字

渇おおふ蒲やあちこち風の渦

乳乾び千年茂る銀杏かな

鳶は目の高さ緑雨の朝日山

○盆帰省関西弁の子を連れて

金沢　中條睦子

気だるさの喉をすべる心太
ふるさとの復興遅遅と蟬しぐれ
芙蓉の葉喰ふて芋虫ひすい色
忌に集ふ朝摘み茗荷携へて
河童忌を過ぎて四日や純子の忌

金沢　今越みち子

髪切虫車のドアにひげを振る
山蟻の列や参道ながながし
盆栽の尺取の枝すぐにばれ
先達の激しき踊猿田彦
熱熱のピザ切り分くる盆休み

金沢　伊藤美音子

日焼子の大きな声の受け答へ
法螺の音に動き出したる夏の霧
燭涼し岩屋に在す忿怒仏
少年のつれなき返事青ぶだう
入船の波に紛るる大海月

金沢　高田たみ子

七七忌納屋を出入りの親燕
青梅雨や野良猫居つく農具小屋
腹見せて寝そべる犬や酔芙蓉
○前かがみなる本地仏薄暑光
鎮りの旧知事官舎緑さす

金沢　豊田高子

瀧垢離や行者の諷経きれぎれに
荒らかに瓦礫の街を神輿練る
登り来て露の涼しき草浄土
落鮎や荒瀬のひかり曳きて跳ぶ
水の翳日の翳走る桜蓼

金沢　松井佐枝子

老鶯や山路に足の定まらぬ
とうすみのゆらゆらと来てゆるる葉へ
花畑へ喇叭のごとき蟇のこゑ
災昼を逃れてガレのガラス展
○桜木の茂り芸妓の通ひ道

金沢　石川純子

茅の輪くぐる雀の後に続くなり
姫だるま手も足も出ぬ大暑かな
天の川眠りの深き子の寝息

○天体のぐらり回るや星飛ぶ夜
姫女苑空地に風の宴かな　金沢　河野尚子
畳み皺広げ朝顔丸くなる
涼しさや寺百畳を開け放し
掻き採つてトマトの脇芽香の青し
晩稲の田早稲の田まだら散居村
大松明復興祈り夏天突く　金沢　道場啓子
明け方の月うすうすと青胡桃
振分けに吊す玉葱猫の伸び
東の山際明く大暑かな
昼寝覚野鳩間遠にくぐもれる
往来を跨ぐ参道月涼し　金沢　杉本年虹
新盆の写真の君へ問ひしこと
干梅と熱き棒茶に背を正し
らんちうのモンローウォーク赤き橋
残照の墓石を抱く瑠璃蜥蜴
菩提樹の蟻の行き交ひ純子の碑
マロニエの葉ずれさはさは巴里祭　金沢　南恵子
ひと声を金魚にかけて登校す
口大きく開けたるままや蛇の衣
山風と川音親し盆の道
通用門出入りに触るる青ふくべ　金沢　松下信子
夕立あと万華鏡なる小宇宙
開かずに草へ返せり落し文
映像の離島巡りや夜の秋
骸かと寄れば発ちたり風の蟬
常備薬あれこれ足せる土用かな　金沢　北川禮子
利家の墓所へ青栗落つる道
花道の横綱扇ぐ大団扇
○青嵐地震の山肌吹き上ぐる
下山仏守り継ぐ寺や青葉風
観音の衣紋の流れ緑さす　内灘　塩井志津
睡蓮や水底つつく稚魚あまた

夕虹や亡き師の句集ひもとけば
荒梅雨や樋を溢るる水の音
薄紅の土用芽伸ぶる早さかな
生垣の夏落葉掃く朝な朝な

津幡　河原昭子

坪庭の空を統べたり女郎蜘蛛
しやがれ声なでつ叩きつ西瓜売る
庭石の大きなゑくぼ梅雨深し
お早うの声の涼しくランドセル
浮雲に心を預けソーダ水
○あかぬけて帰郷のあの子盆踊

七尾　谷渡末枝

噴水のむかう国立博物館
補習授業水着のバッグ足下に
百年の土蔵毀つや蟻地獄
生乾き草色のこる蛇の衣
立秋や烏は声を変へて啼く

敦賀　倉谷ます美

先斗町瀬音の添へる鱧料理
宇治橋の先は万緑天子廟
菅公の宮に柘榴の花ふゆる
一杓に不動の滝の冴かな
五湖眺むる天空の池目高ふゆ

敦賀　鶴田勝子

亀の子の重なりくづれ池の端
炎暑くる母のベッドに万華鏡
戦跡を片白草の埋めつくす
琴糸の里は水良し糸とんぼ
夜店早や光るヨーヨーよく売れて

敦賀　中川雅月

風死して寺の厨の荒砥石
早朝の夫の日課や目高に餌
数珠繰れば障子に映る走馬灯
底紅の庭のベンチに老二人
○盆踊をさの美声の音頭取る

敦賀　中村優

落蟬の鎮守の森に翅震ふ
ぎこちなし古き添水のポコと鳴る
菜園のレイアウト練る秋の朝
酔芙蓉夫婦の会話はづむ朝

長雨や谷地田に遊ぶあめんばう

大阪　入山繁幸

炎昼や遙か橋行く救急車
爆音に探す機影や雲の峰
ジョギングの吾に群なす赤とんぼ
○ちびつ子ら浴衣はだけて旅の夜
鬼やんま悠然と舞ふ石舞台

徳島　福島吉美

海鞘裂けば俎に潮あふれたる
蹲に雀が遊ぶ日の盛
戦ひのいつまで続く蟬時雨
汗の手に初の新札透し見る
潮引きて島の繋る阿旦の実

徳島　村上和義

片蔭もなく鎮りし爆心地
祖母の背の蒼き弾痕終戦日
地に弾く下駄の歯音や阿波踊
風涼し藍の館のしじら織
肥松のよく燃ゆる日や魂迎へ

徳島　宮西修一

梅雨明けの空の青きを眩しめり
日盛や影は足下を離れざる
炎昼の道路を穿つ掘削機
一輛車青田に波を起したり
夕立来て町家の軒を譲り合ふ

徳島　平岡功

○亡き父の海の墓標や雲の峰
入院の母を見舞ひて団扇風
城山を丸洗ひせし大夕立
哲学の道に憩ひて冷奴
無住寺の池埋め尽す布袋草

石井　木内マヤ

黒揚羽去年より低く軒に舞ふ
夏祭母に土産の玉子焼
赤ちやんの匍匐前進夏座敷
○しゆるしゆると落つる花火のさびしさよ
つばめの子口より大き餌貰ふ

小松島　岡田あゆみ

ゆらゆらと形代波にさらはるる

長梅雨やグーパーさせる足の指

○親不知からんと抜かれ梅雨明くる

口開けて鴉飛び交ふ大暑かな

ブーメランとなりて空切る雨燕

長崎　丸本祥夫

原爆忌刑務所跡に平和像

仰向きて死を待つ蟬の肢泳ぐ

○立葵行き止りなる修道院

亡き人と出逢ふ予感や螢狩

雀鳩烏鳶と初夏の空

西海　山下敦子

黒南風の七日続くや引戸重く

飾り棚に置物のごとおにやんま

鎧脱ぎ見栄捨て今はアッパッパ

一晩中波音を聞く帰省かな

夕焼の海向いて立つ家も墓も

宮崎　中山宣

秋風や土師器を飾る索麺屋

○切り岸にしかと根を張る乱れ萩

海風や素通し土間の秋簾

雁来紅列島ゆさぶる低気圧

海草を庭先に干す秋暑かな

宮崎　中山芳教

駐在に濡るる白バイ白芙蓉

遠鳴りの電車の音や地虫鳴く

神の田（宮居の南）を廻る標縄早稲育つ

○新酒酌む五臓六腑のよろこべり

秋日和牧水詠みし尾鈴山

宮崎　鳥居達史

音のなき風に流るる糸とんぼ

名君の仏塔護るるのこづち

刻み煙草の仕草一席魂迎へ

点滴の血管さぐる秋の蟬

禅寺の閻の安らぎ虫時雨

那覇　大湾宗弘

海風に白き香りや浜万年青

窓に透けやもりの腹の卵二個

短冊の平和のゆがみ星祭

盆道や雑草ばかり生ひ繁る

秋の雲しばし不在の猫帰る

那覇　中本清

息止めてナイフ刺したる鳳梨かな
自決絵の墨の滲みや鬼薊
村井戸の水押す風や棕櫚の花
郷土史に父祖の名小さし黒木の実
秋の日が落つれば風の文机

西原　宮城勉

こはごはと児の指二本蟬の殻
電気浮子飛ばす突堤星涼し
○深海の卒寿経し兄夜光虫（緊沈の学童疎開船対馬丸）
雲裂きて風の暴るる原爆忌
引売りの声音けだるし敗戦日

（ベルリン）鈴木波江

浮き沈むぼうふら水の闇深し
運河渡り来る鐘の音も晩夏
川辺てふカフェに馴染み夏終る
船溜りにあまたの船や秋の声
新秋の土手の遥かの朝ぼらけ

謹告

田村愛子様（創刊同人・金沢）は、令和六年八月十九日、ご寿命を全うして安らかに旅立たれました。享年九十五歳。

昭和四十六年に「風」同人となられて以来、主に北陸俳壇を中心に長きにわたってご指導をいただきました。

「万象」同人会では、発足以来十数年にわたって、副会長の任に当たられ、会の発展にご尽力いただきました。

茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

万象俳句会

お詫びと訂正

9月号「東西南北」3段目の前田貴美子さんの句に誤りがありました。お詫びして訂正します。

誤　茶を摘める
正　菜を摘める

同人会だより

第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集

故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画した賞です。年一回、同人より作品を募り優秀作品を表彰、「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待しています。

応募資格　「万象」同人に限る。

作　品　15句、未発表作品に限る。
四百字詰原稿用紙（B４判）とし、冒頭欄外に題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明記し一通（コピー可）を提出のこと。封筒に「中山純子記念俳句賞応募」と朱書きのこと。

選　者　内海良太、江見悦子、小林愛子、福島せいぎ
柳澤宗正、曽根　満、中條睦子

締　切　**令和７年１月31日（金）**

宛　先　〒４２０－０８０３
静岡市葵区千代田６－６－27－１　杉澤　修

Eメール　os08080918@outlook.jp　杉澤　修
（郵送、Eメール添付送付、いずれも可）

入賞発表　「万象」６月号（優秀作品、選考経過を掲載）
同人会総会で受賞者を表彰。

９月の「万象」オンライン同人句会高点句

11　口笛を覚え少女の夏終る　三屋　英俊（佐倉）
10　そよ風が音色に変る江戸風鈴　岡村　純子（東京）
8　日のうねり風のうねりを葛の花　穂苅　照子（流山）
7　秋の灯や入江の形に点りゆき　山下　敦子（西海）
6　風死して影の貼り付くアスファルト　穂苅　照子（流山）
5　標本のごとくに鮎の骨のこす　内海　良太（佐倉）
　人絶えて故郷広し天の川　恒川　清爾（鎌倉）
4　この町はかつて塩田赤とんぼ　村上　和義（徳島）
　稲の色吸うて田水の落ちにけり　曽根　満（静岡）
　風の盆灯が映ゆ雨の石畳　成瀬真紀子（射水）
　自販機の釣銭にある残暑かな　桑原優美子（東京）
3　轡虫加はる破調夜半の闇　杉本　年虹（金沢）
　根岸まで律走らせる新豆腐　名和　政代（東京）
　魚に振る塩の湿りや夕野分　喜多尾明子（日野）
　秋暑し洗濯ばさみ壊れ飛ぶ　桑原優美子（東京）
　白山の山並遙か早稲を刈る　大木　茂（足利）
　秋茄子の焼目の格子地酒酌む　大久保　進（川崎）
　限りなき青の世界を赤蜻蛉　中鉢　弘一（札幌）
　ポケットの遺影へ語り登高す　南　恵子（金沢）
　八橋を沈め蓮の花満つる　穂苅　照子（流山）
　月光の草のしとねやつづれさせ　神田美穂子（富士）
　新米に令和の御代の米騒動　杉本　年虹（金沢）

（＊句頭の数字は点数を示しています）

珈琲ぶれいく㊿

今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にシンニョウ（辶）の付く漢字を入れてみましょう。

1 月天心貧しき町を□りけり　与謝蕪村
2 夏帯や一□といふは美しく　鈴木真砂女
3 □ざけて人寄せもする春火桶　高濱虚子
4 能登麦秋女が□ぶ水美し　細見綾子
5 とくとくと血は□るかな冬至風呂　中村苑子
6 山国の闇恐ろしき□儺かな　原　石鼎
7 海□に青嶺寄せ合ふ記紀の島　内海良太
8 注□縄に撚られし藁の誇らしく　矢島渚男
9 みちのくの伊□の郡の春田かな　富安風生
10 子規□きし夜の月明と眺め入る　飛高隆夫
11 ゆるやかに着て人と□ふ螢の夜　桂　信子
12 夏木立故郷□くなりにけり　正岡子規

【正解】
1 通　2 途　3 遠　4 運
5 巡　6 追　7 道　8 連
9 達　10 逝　11 逢　12 近

思い出す人々

第21回【恵果】

西山　厚　全24回

空海は道に迷っていた。儒教でも、道教でもない。仏教だ。それはわかっている。けれども今ここにあるような仏教ではない。本当の仏教はどこにあるのか。

経路、未だ知らず。岐に臨んで幾度か泣く。

岐路に立ち、何度も涙を流す若き日の空海。そうしてついに『大日経』と出会う。しかし密教経典の深い意味がどうしてもわからない。唐へ行くしかない。

長安の都で空海は恵果に会った。お前をずっと待っていたと恵果は言った。恵果の寿命は尽きようとしていた。時間がない。すぐに始めよう。わずか数か月で恵果は密教のすべてを空海に伝え、そして死んだ。

人は死ぬ。あたり前だ。だからこわがる必要はない。恵果の遺言にはこう記されている。

わずかに汝が来れるを見て、
命の足らざらんことを恐れぬ。

お前に会って初めて死ぬことが恐くなった。お前にすべてを伝え切るまで生きていられるだろうか。

幸いに伝え終えた。恵果は心満ちてこの世を去ったに違いない。恵果に出会って、空海は空海になった。

公益社団法人 俳人協会

同人作品の佳句

江見悦子

ひとゆらぎして花合歓の町暮るる　林　陽子

〈虹飛んで来たるかといふ合歓の花〉「花合歓」と言えば、綾子先生のこの句を思い出す。夢のようにはかなく美しい花を持つ合歓の木は、いつも伸びやかに葉を拡げて風を起こし、風に揺れ続ける。この句、昼間は活気に満ちていた町が、「花合歓」の「ひとゆらぎ」で暮れようとしている、と詠んだ。夜になれば葉を閉じ、人人に安らかな眠りを約束してくれる合歓の木である。詩心の溢れる句。

風化せし石像の面晩夏光　中鉢弘一

石像には何が彫られているのだろう。長い年月を経て風化した表面の彫りは定かではなく、ただ晩夏の光が射すばかりである。石像のざらざらとした触感、そこに乱反射している日の光、夏が終わろうとしている晩夏の情景である。

敷藁を足して西瓜の向き替ふる　澤　照枝

西瓜を丸く育てるために、また地表の水分で腐ることを防ぐために、時時置き換えてやることが西瓜を育てるこつであるらしい。炎天下に敷藁を足してやることは立派な西瓜を作るためには欠かせない作業。重くなった西瓜を抱えて、丁寧に優しく向きを替えている作者の姿が見える。

八月を迎ふ昭和の傷深く　山本右近

今年は昭和20年の敗戦の年から79年、戦争の時代と言われる昭和を知る人も少なくなった。作者の右近さんは15年生まれ、5歳の時に敗戦を迎えた。この句、「昭和の傷深く」に万感の思いがある。この時代を生きた日本人全員が、戦後様様な「傷」を抱えて生き抜いてきた。そのことに深く思いをいたしている。

原爆忌三吉詩集読み返す　塗木翠雲

「三吉詩集」とは、詩人峠三吉の『原爆詩集』のことだろう。8月6日の朝、爆心地広島から3キロの場所で被爆した峠三吉の代表作であり、44編の詩が収められている。その中にひらがなだけの8行の詩「序」があり、「にんげんをかえせ」の文言が広く知られるようになった。塗木さんは、原爆忌を迎えるとこの詩集を読み返すのだ。淡淡とした詠みぶりだが、平和を希求する作者の、反戦への深い思いを感じる。

辛口の言葉さらりとソーダ水　穂苅照子

ソーダ水は、グラスに注ぐと炭酸ガスの気泡が生まれ、口に含むとしゅわしゅわと細かい泡がはじける。その爽快感から活動的な若さを感じる飲物だ。この句、喫茶店で友人と向き合う作者が、何か相談事でも持ち掛けたのか、友人からさらりと「辛口の言葉」が返って来た。同情の言葉を期待していた訳ではないけれど、と複雑な思いの作者。ちょっとした感情の行き違いと、卓上のソーダ水の取合せがユニークだ。

スカイツリーの影ながながと秋の川　広瀬俊雄

この川は隅田川。近くに屹立するスカイツリーが川面に真っ直ぐに影を落としている。秋になって冷やかに青く見える隅田川である。恐らく総武線の車窓から見下ろした光景だろう。「ながながと」が面白い。通い慣れ、また見慣れた場所であっても、定点観測を怠らず作句する姿勢に敬服する。

玉虫の六肢をたたみ死の形　喜多尾明子

大胆な思い切った句。「玉虫」が夏の季語。死後も色あせることのない美しい甲虫である。玉虫が六本の肢をきっちりとたたんで死んでいる姿を「死の形」と言い切った。「たたむ」ではなく、「たたみ」と軽く切れている。最後まで命を使い果たした玉虫の、華やかさを保ち続ける姿への賛嘆の気持、と言ったら言い過ぎだろうか。

神輿舞ふ八百屋駄菓子屋パチンコ屋　恒川清爾

神輿が町内を練っている祭の一場面。「舞ふ」とあるから、掛け声とともに神輿を大きく揺さぶりながら、「八百屋駄菓子屋パチンコ屋」の並ぶ古い町並みを進んでいるのだろう。中七座五の「ヤ」「ダ」「パ」のア音の頭韻がリズミカルで、句に活気と力強さを与えている。

天体のぐらり回るや星飛ぶ夜　石川純子

星の流れる夜空を眺めていると、いつか自分自身を中心にして、空全体、宇宙全体が回り始めているような感覚に陥ってしまう。地球という天体に住む、人間の存在の小ささ。星飛ぶ夜のロマンでもある。

あかぬけて帰郷のあの子盆踊　河原昭子

どこかで見たような、そう、学校を出てから都会に働きに出たあの子、都会の水に洗われたのか、すっかりあかぬけて盆踊を楽しんでいる。そんな囁きが聞こえてくるようだ。上五のア音の響きが印象的な、軽やかで明るく楽しい句。

亡き父の海の墓標や雲の峰　平岡功

作家阿川弘之の代表作に『雲の墓標』がある。宇佐海軍航空隊を主な舞台にした特攻隊員を主人公とした小説である。平岡さんのお父様は戦死なさったのか。「雲の墓標」という言葉には、故郷を遠く離れた海の彼方で亡くなった兵士たちへの鎮魂の思いがある。海上高く聳えたつ雲を眼前に、若くして亡くなった父上の面影を偲んでいる。

しゆるしゆると落つる花火のさびしさよ　木内マヤ

空高く華やかに開いた揚花火が終わる時の寂しさを詠んだ。「しゆるしゆる」という擬音語に実感がある。〈おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな〉芭蕉の句と同じ趣の句。

深海の卒寿経し兄夜光虫　宮城勉

昭和19年8月22日、沖縄の学童を疎開させるために長崎へ航行していた対馬丸は、途中米潜水艦に撃沈された。乗船していた学童、引率教員、一般疎開者、兵員ら1788人の内、疎開児童784人を含む1484人が亡くなった。その中に宮城さんのお兄様がいた。生きていれば今年卒寿を超えられた筈だが今も深海に眠っている。波間を漂うおびただしい夜光虫が発する青い光は、祈りの、また魂しずめの光であろう。

新同人発表

次の諸氏を「万象」新同人（令和6年11月1日付）に決定しましたので発表します。

宮田千恵子（福　岡）
谷　廣司（札　幌）
一由久美子（東　京）
為永香月枝（敦　賀）
星野　信子（横　浜）

万象俳句会

新同人の皆さんへ

令和6年度、万象俳句会の新同人の皆さん、おめでとうございます。

「万象」に入会以来、句友と切磋琢磨されてきた、皆さんの積極性と持続力に敬意を表します。

「万象」は、「風」の結社理念を継承し、「俳句実作の態度・方法としての即物具象の写生」を基本に、今年は創刊23年目となりました。

新同人の皆さんを迎えて、「万象更新」という言葉通り、新たに全員で、「個性と新しみのある俳句」「詩として魅力ある俳句」を目指して行きたいと思います。

皆さんのそれぞれの句会での活躍が、「万象」全体の力となって広がっていくことを期待しています。

これからも一緒に俳句を楽しみましょう。

ご健吟を祈ります。

主宰　江見悦子

宮田千恵子（福岡）

〒814-0803
福岡県福岡市城南区桶井川2-5-2

昭和18年　佐賀県生まれ
平成16年「万象」芙蓉句会入会
平成18年「万象」入会

佐賀県に生まれた私は、父の戦死で、母の生家である福岡県粕屋郡に帰り、高校卒業後、建築会社に勤務。縁あって結婚後は、二人の夢であった会社を設立することができました。

ところが、平成14年3月、突然に夫の余命宣告を受けたのです。夫はあっという間に旅立ってしまいました。続いて母の認知症が発症。仕事と介護に奔走する日日が始まりました。

心に余裕をなくしている時に、芙蓉句会（故井山幸子先生の教室）を紹介して頂きました。見学に行った句会で即、選句をして……それが平成16年6月、俳句との出会いでした。平成18年8月には「万象」に入会。吟行旅行や季節ごとのイベントなどの吟行俳句の楽しさを教えて頂きました。11年間の介護の期間、私の心を潤してくれたのは俳句でした。

残念なことに、平成28年3月、井山幸子師が亡くなられ、〈燭を灯し師を送る夜や春時雨〉の句を献じました。井山師の没後は、小林愛子名誉顧問に御指導頂いております。

母の死後、私は民生委員児童委員を終え、社会福祉協議会委員・町自治役員他、地域活動をしています。

谷廣司（札幌）

〒062-0053
北海道札幌市豊平区月寒東三条18丁目3-17

昭和24年　北海道生まれ
平成11年「風」入会
平成14年「風」終刊と同時に「万象」入会

今年の8月21日に満75歳になりました。

昨年、50年勤めた造園会社を退職し、現在は個人で造園関係の仕事を少しさせていただいています。

我が家は妻と猫一匹、金魚と泥鰌が数匹。近所に娘3人と中二を頭に0才迄の女子4人、中一、小五の男子2人。合計6人の孫たちとの賑やかな日日が続いています。

常に体調は良く大変元気ですが、年相応の病とも付合っていて、酒はごく少量を月に一、二度で充分満足しています。たばこは吸わず、餡子が大好物です。

俳句を始めて25年になりますが、いまだによく解りません。それでも、俳句は大好きです。俳句以外には10年ほど続いているものにジム通いとスキー、サイクリングがあります。それに加えて、昨年から週1回福祉のボランティア活動、ピアノと詩吟の教室に通っています。

いつまで続くか不安ながらも、何とかなるだろうと大いに欲張っている今日このごろです。

一由 久美子（東京）

〒165-0022
東京都中野区江古田4-12-11

昭和30年　長野県生まれ
平成22年　同級生と通信句会開始
令和4年　東京俳句スクール入会
令和5年　「万象」入会

この度は、「万象」新同人にご推薦いただき、ありがとうございます。

幼い頃、俳句をしていた母に連れられて句会や吟行に同行し、短冊を配る手伝いをしたことや、花や虫の前をいつまでも動かずに見ていた母の姿が思い出されます。

私が俳句を始めたのは、40数年ぶりに再会した同級生の勧めがあったからです。季節感が薄れてきたように感じられる生活の中で、俳句を学ぶことによって、四季の移ろいがはっきりと感じられるようになり、俳句が楽しみになっていきました。

定年退職して、今は町会の活動をし、旅行を楽しんでいます。季語を学ぶことで、些細な日常生活のあれこれに、新しい感動が生まれる気がしています。感動を俳句にするのは難しいですが、句会で先生方の鑑賞や講評を聞くことが、大変勉強になっています。これからも苦しみかつ楽しみながら、俳句を学びたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

為永 香月枝（敦賀）

〒914-0124
福井県敦賀市市野々町2-920

昭和16年　福井県生まれ
平成16年　「霞句会」入会
令和3年　「霞句会」閉会につき同年　「万象」入会

この度の「万象」新同人のご推挙、誠にありがとうございます。私は戦後引揚げて以来、祖父母のもとで養育されました。晴耕雨読を絵に画いたような暮しでした。

長女の小学校入学と同時に、ＰＴＡの読書サークルに籍を置いていましたが、俳句は未知の世界でした。子育てが一段落した頃、「ホトトギス」の会員であった隣のご夫妻から「吟行に行こさ。句帳持っておいで」と敦賀弁で誘われ、「銀行なら通帳？」と首を傾げつつ、言われるままに芭蕉ゆかりの色が浜へとドライブ。吟行と句帳の謎が解けました。

そのご縁で「霞句会」に入会し、会が閉じるまで学ばせてもらいました。句会は月1回でしたが、花換祭、曾良忌、芭蕉全国大会、翁の忌等等、市内の俳句大会に参加させていただき、「万象」の諸先生方のご指導を仰ぐ機会もあり、「万象」会員の皆様とも顔見知りになりました。先師が会を閉じる時に、「万象」への入会を当時の「万象」敦賀支部長でいらした故石田武男先生にお願いして下さり、お引き受けいただきました。

星野信子（ほしのぶこ）（横浜）

〒240-0045
神奈川県横浜市保土ヶ谷区川島町
１４４０くぬぎ台５−１２−１０２

昭和26年　福岡県生まれ
令和2年　保土ヶ谷句会入会
令和5年　「万象」入会

この度は、「万象」新同人にご推薦いただき、誠にありがとうございます。

俳句に興味を持ったのは、テレビ番組の「プレバト!!」でした。紙とペンと歳時記があれば手軽に楽しめるものだと考えていました。ところが、俳句は奥が深く難しいと知りました。けれどもとても面白くて、もっと勉強をしたいと思っていた頃に、偶然「万象」保土ヶ谷句会を知り、令和2年1月に見学をさせていただきました。小林愛子先生の丁寧なご指導とお人柄に感銘を受けて入会しました。

翌月の句会から意気揚揚と出席したのも束の間。3月からはコロナ禍で句会が中止となり、長い時を過ごすうちに俳句をあきらめかけていました。句会再開のお知らせを頂いた時には喜びがあふれました。

小林愛子先生の「日日の生活の中で見つけたこと、感じたことを、自分の言葉で表現して俳句を楽しみなさい」との教えを胸に、これからも句作に励みたいと思います。

特集
俳文とは何か
堀切 実／坪内稔典／浅沼 璞
井上弘美／林 桂
松下カロ／宮崎斗士

人と作品
河村正浩『枯野の眼』
坂口昌弘『忘れ得ぬ俳人と秀句』

巻頭三句
池田澄子／河原地英武
白濱一羊／松田ひろむ
水田むつみ／桑田真琴

今月の華
甲斐由起子／古澤宜友

俳句と短歌の10作競詠
大塚 凱＋菅原百合絵

好評連載
成瀬政博 とりあえずの日々
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西 朋 俳句へのまなざし
井上泰至 俳句の詩語 イメージ辞典
神作研一 てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
堀田季何 諸家書架
二ノ宮一雄 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2024年11月号　10月20日発売 定価1100円(税込)
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

晩夏光

濵谷和代

葉から葉へ滴る楡の青時雨
新樹光湧き水しぶくとめどなく
雪渓や山裾海へ利尻富士
サロベツ野蝦夷萱草の海際へ
十勝野や青嶺稜線重なりて
白樺の葉擦れの音や夕端居
大西日潮の渦巻く奥入江
花さびた海岸線を一輌車
瞬く間岬は海霧に包まれり
晩夏光大海原を金色に

夏でも爽やかな気候とされていた北海道も暑い日が続く。旅行は海外と思い観光してきた。しかし、コロナ禍では旅行もできず、いつでも行けると考えていた道内を愛車のミニクーパーで廻った。車窓からの壮大な景色、自然の豊かさを再認識、魅了された。北海道は広い。海外とは違う、未だ見ていない道内の四季のある景色を俳句にしていきたいと目標ができた。

そのためにも季節感が失われることがない未来であってほしいと願うばかりだ。

藍甕

光岡れい子

藍甕へ白布ゆつくり夏はじめ
藍の華生るる甕や繍毬花
夕虹や庭に抱き合ふ道祖神
工房へ飛石十個綿の花
茅屋根へひかり降らせる柿若葉
江戸期より守り継ぐ甕薄暑光
機止めてつばめの巣立見守れり
藍建てる染師の五感風薫る
藍汁をねぶり確む薄暑かな
二百三十年継ぐ梁柱雲の峰

益子には益子焼の他にも有形文化財に指定される藍染工房がある。

藍甕は江戸期に造られ、様様な苦難や戦火を乗り越え、230年過ぎた今も、藍の華を咲かせている。素手で染めるので、染師の手や爪は見事なまでの藍色に。それでも満足のゆく藍色を出すのは難しいとのこと。近くで工程を見せていただいたが、大変な苦労が窺える。

私も、昔の藍絣を服に直して愛用している。この祖先の遺産である藍を、後世に永く継いでいかれることを願っている。

罌粟の花

福島吉美

徳島市在住の福島吉美さんは大坪景章先生の言葉「俳句は眼前にあり」をいつも心にとどめて句作をされているという。まれに非日常の光景に出くわし感動が湧くこともあり、身近な材料で俳句を楽しみたいと言われる。

罌粟の花墓地の四方に飛び咲けり

寺の境内を散歩すると、墓地のあちらこちらに罌粟の花が咲いているのが見られた。作者は真紅や紫・白などの罌粟の一重または八重の花を美しく眺めている。

あるなしの風に震へる樫若葉

新葉が萌え出る初夏の候となり、出たばかりの樫の若葉は柔かく初初しい。わずかばかりの風に震えるのである。作者の観察眼が鋭く写生の対象を捉えている。

糸引きし蜘蛛が宙舞ふ冠木門

冠木門とは二柱の上方に冠木を渡した屋根の無い門をいう。作者はそこに糸を引きながら中空を舞う蜘蛛の姿を見た。しっかりした写生の句としてとらえた。

早苗田に片足立ちの鷺一羽

田植が終わったばかりでまだ苗が小さく、水面に太陽の光が反射して周りの景が美しい田圃を早苗田という。作者はそこに片足で立っている一羽の鷺を見た。

足場組む日焼きはまる少年工

作者は散歩の途中、足場組みの作業をしている現場に出くわした。若年労働者の逞しく日焼けした肌に感心した。少年の「日焼きはまる」の措辞に感動が集中した。

竹の秋

塗木翠雲

千葉県四街道市在住の塗木翠雲（ぬるきすいうん）さんは今回、旧佐倉藩の城下町を中心に吟行をして句作をした。良き句仲間に囲まれた至福の生活の一部であると言われている。お住いの四街道市には緑豊かな田園風景が広がり里山もある。

鍵の手の多き町屋や花ミモザ

江戸東方の要衝として重視され、有力な商家には出桁造りの主屋と並んで袖蔵が建つ当時の商家の構えが残っている。作者はそこに常緑高木の花ミモザを見た。

春の月くらやみ坂を灯しけり

武家屋敷と武家屋敷の間にある坂道で樹林が鬱蒼と茂り、昼間でも若干暗めのことから「くらやみ坂」という名前がついたという。作者は坂を照らす春の月を観た。

堀深き馬出し濠や花の塵

馬出し空濠は馬の出入りを敵に知らせない様にするための土手として機能していた。敵の攻撃から城門を守る役割があった。作者は深い堀に散り敷く桜の花を見た。

大手門跡の広場の草青む

佐倉城大手門跡は佐倉城址公園の外にあり、広大な広場には「佐倉城大手門跡」の石碑と佐倉城写真の掲示板が建っている。作者は下萌の原に立ち往時を偲んでいる。

昼暗きひよどり坂や竹の秋

武家屋敷通りに隣接した古径で、江戸時代からほとんど変わらない美しい竹林に囲まれている。緩やかに曲がる坂道には四ツ目垣があり、作者は両脇に竹の秋を見た。

北から南から

八海山の火渡り式

新潟　髙橋ひろ

新潟県中央付近の山岳地帯。越後駒ヶ岳、中ノ岳、八海山は越後三山と呼ばれる。中でも八海山は信仰のお山として毎年10月20日に大祭・火渡り式が行われ、鈴懸などの装束に身を包んだ行者、修験者、遠近の信者が参集する。

祈祷の後、広場の護摩が焚かれると、その煙を修験者が幣に享けて参拝者へ振り掛ける。参拝者は争ってその煙を身に受け、健康・商売繁盛を祈願する。凡そ二時間、午後一時頃に火伏が行われ、燠火が掻き拡げられて火渡りの道が付けられる。先達・修験者・信者・参拝者の順に素足で燠火の上を渡るのだ。小学生などは流石に熱いので小走りで。渡り終えた目はキラキラしていた。とは言っても、私は実際の火渡りを見たことが無く、報道映像の受け売りに過ぎない。

私が見たのは火渡りの焼け跡だった。俳句を齧り始めたばかりの私たちが加えてもらったのは、浦佐の元「花守」の志城柏師に育てられた女性同人だけの勉強句会であり、そこの姐様方に「せめて燃え跡なりとも……」と願ったからだった。

火渡り跡は杉の林を抜けて来た雲の中にあった。雲は佇む人らを見せたり隠したり。佇む人人は誰ひとり口を開かず、神の山が冬に入って行く姿だけを見つめていた。

八海山の名は、この山に池が多いことにも由来するという。日池、月池、瓢箪池など八つの池があるからとも。古くは数えきれない程も池があり、その一つずつに八大竜王が棲み、水を司ったとか所説あり、地域住民に親しまれている。

越後湯沢に降り立ちしこと爽やかに　細見綾子
雪灼けの皺のなかまで越後人　沢木欣一
魚沼や凍てて歯に滲む大根煮　志城柏

八海山はまた、山麓住民へ農耕の水を与える水分山（みくまりやま）と考えられてきたことが、八海山信仰の重要な一面を持つ。雪深い土地ながらも、その雪を利用しての産業も盛んな地となっている。築場も近い。

火渡り会四方へ破魔矢打ち込めり　兼成多賀子
火渡りのすんで見廻る下り簗　山田春生
火渡りや八海山に秋の虹　金子知代
方二間火渡り跡の霧湿り　髙橋ひろ

八海山を身近に眺めるこの地へ何年通ったことか。

佐野昴句会に江見主宰をお迎えして

「佐野昴句会」は会員10名、毎月第3水曜日の午後1時から始まる佐野の同人句会で、会場は城址公園内の城山記念館である。

8月21日の月例句会に、江見悦子主宰をお迎えしてご指導を仰いだ。会員10名の各5句を無記名・順不同の一覧表にして、主宰に事前にお送りした。

亀田やす子代表の挨拶、江見主宰のご挨拶をいただいた後、自己紹介をし、句会が始まった。

主宰から「俳句を作るとき大切なものは詩因である。詩因は実感、感動であり、それは何かに出会ったとき、感じたときの俳句の種である」とお話があった。句の講評に入る。

一．季語について

季語の本意を理解するには、「歳時記」をよく読むこと。歴史的な背景まで理解することができる。

野球児の帰り仕度や遠稲妻

遠稲妻は季語にならない。稲光、語順を変えて稲妻に。

湖涼し甕度たび急降下

涼しは夏。しかし、甕（みか）のことを詠んでいる。「甕」は冬。

二．切れと文法等について

句の中の切れについて。や・かな・けりとそれ以外の句の切れの確認と文法や言葉の使い方。

枯山水砂利のうねりへ夏の蝶

「枯山水の」としたいが「の」は説明的になる。

糸一本の蜘蛛ひたすらに風を待つ

「の」はなくても情景がわかる。下五は「風を待ち」にしては？　待っている思いが強まる。

かたつむり句碑へ落款さながらに

「さながらに」は説明。直喩表現「落款のごと」では？

虫すだく闇の深きや日記閉づ

「○○や～」の時、下五は連体形にする。

三．一句一章（一物仕立て）、二句一章（取合せ）について

即物具象の写生を基本とする「万象」では一句一章の句が多くなる。一句一章の句も大事にしたいが、二句一章の句の場合、二つの事物を取合わせることで思いもかけない新しみが生まれ、それが飛躍に通じる。

山内の緑とらふる猪目窓

一句一章の句。

虫すだく闇の深きや日記書く

二句一章の句。

（まだまだ、ご指導を頂きましたがこの辺りで……。）

「詠む人の実感を大切にしたい。心に刺さったもの、何に感動したのか、それを広げたり、深めたりする。その人の思想、人生経験、興味の深さ、広さがそのまま俳句になる。自分なりの感じ方を細かく拾い集めること。自分の好きな俳人の句を詠むこと」とのお話をいただく。

人気なき骨董市や梅雨の明　店網洋子
日矢の射す新田の荘の初穂かな　売野緑
てんでに撞く鐘の音違ふ夏の果　茂木弘子
丸文字の「赤点回避」星祭　上岡佳子
糸一本蜘蛛ひたすらに風を待つ　島田和枝
勅額を掲ぐる寺や夏木立　芝宮留美子
野球児の帰り仕度やいなびかり　阿部澄
魚の骨きれいに残り新生姜　加藤季代
彫り深き衣紋の坐像夏の果　増田幸子
拾ひたる天蚕の肌理鮮しき　亀田やす子

最後に15分の休憩をかねて、主宰から席題が出される。会場玄関に置かれている「紐鶏頭」あるいは周辺のものをと。主宰をお迎えし緊張しましたが、和やかな楽しい時間であり、とても勉強になる有意義な句会になりました。

残る蟬城址の森の句会果て　江見悦子

（記・芝宮留美子）

子規の俳句鑑賞（七）

林　徹

藤の花長うして雨ふらんとす

明治三十年作。子規の庭に藤棚があったとは聞かぬから、この句は題詠であろう。見るものの少ない病床吟としては、やむを得ないことである。それにしてもこの句、長く垂れた藤の花の本情をよく捉えていて、詠みぶりにも見習うべきところがある。自分でも満更ではないと思っていたのだろう。〈「藤の花長うして雨ふらんとす」とつくりし我句人は取らざりき〉と、短歌にまで詠んでいるのが面白い。

和歌に痩せ俳句に痩せぬ夏男

明治三十三年作。夏痩を季語とする句と読むべきだろう。大病で痩せた我が身を、「和歌に痩せ俳句に痩せぬ」と笑い飛ばしている。子規は正直で、痛ければ絶叫もするし、弱音も吐いた。この句は負け惜しみでも、見得でもない。我が身を諧謔化することで、みずから慰めているのである。

鶏頭の十四五本もありぬべし

明治三十三年作。子規俳句を語るとき、どうしても触れぬわけにはゆかない句である。この句に対する評価はおおむね決まっていると言ってよいだろう。この句を鑑賞するのは屋上屋を重ねるだけだから本当のところあまり気が進まないが、ただ、〈いくたびも雪の深さを尋ねけり〉についても同じことが言えるわけだが、この鶏頭の句は、寝返りすらもままならぬ子規が、病床から眺めた景という前提があって初めて名句と言い得よう。

それから今ひとつ、現代は俳句の国際化ということで、俳句の翻訳も大変盛んなようだが、このことについては私は絶望的といっていいくらいに悲観的である。さしあたってこの句などは、外国語に翻訳することが絶対不可能な好例であろう。この句が内包する詩は、鶏頭の十四、五本もあるようだ、でもなければ、鶏頭は十四、五本もあるに違いない、でもないのだから。

仏壇の菓子うつくしき冬至哉

明治三十三年作。薄暗い仏壇に供えられた菓子が美しいと捉えたのが、まず非凡である。

しかし、これがもし春の句だとしたら、それほどの句にはならなかっただろう。冬の中の冬の日、冬至であることが、菓子のうつくしさをひきたてている。うまいものだ。

（次号につづく）

『子規・写生―没後百年―』（沢木欣一編　角川書店）より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑮

橋本 清

近江の海　夕波千鳥　汝が鳴けば
心もしのに　古思ほゆ　（三・二六六）

この歌についてもう一つ触れておきたいことがあります。第二句の「夕波千鳥」は、夕日の照らす波の上を飛び交っている千鳥ということで、テニヲハなどを省いて一語にしたような言葉です。こういう言い方は『万葉集』に時々見られるもので、他にこんな例があります。

「藻伏束鮒」（四・六二五）藻に隠れている一束（握りこぶしの指四本分の幅）ほどの体長の鮒
「葦別小舟」（一二・二九九八）生い茂った葦を押し分けて行く小舟

「夕波千鳥」は、その語感の美しさによって多くの詩人たちの詩情をかき立てました。それらは漂泊・流離の憂いとも言うべき情感に満ちています。

島崎藤村は明治二十九年（一八九六）、都落ちして陸奥にさすらうような思いで仙台の東北学院に赴任した時、「草枕」と題する詩を作りました。次はその全三十連中の第一連。

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

（「若菜集」明治三十年）

横瀬夜雨は、越後から常陸に奉公に来た「お才」という若い娘の、故郷を遠く離れて暮らす、心細く寂しい思いを九連の詩に歌いました。次は前半の四連（「夕月」明治三十二年）。

女男居てさへ　筑波の山に　霧がかかれば　寂しいもの
佐渡の小島の　夕波千鳥　弥彦の風の　寒からむ
越後出てから　常陸まで　泣きに遙々　来はせねど
お月様さへ　十三七つ　お父恋ふるが　無理かえな
次は石川啄木が北海道を放浪していた頃を回想した歌。
しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな　（「一握の砂」明治四十三年）

真冬の月の輝く下、釧路の浜辺をさまよいながら、千鳥の鳴く声に漂泊・流離の思いをかき立てられているのです。私はそこにも人麻呂の郷愁が流れているのを見出すものです。

もう一つ例を挙げましょう。

旅や浜宿り　草のヤーレ葉ど枕　寝ても忘ららぬ
我親のヤーレ我親の御側　チヂュヤーヤ　ハマ　ウティ
チュイチュイナー　（「日本民謡集」岩波文庫）

この「浜千鳥節」は、浜辺に宿る旅人が故郷の親を偲んでいるという内容の沖縄民謡です。「チヂュヤーヤ……」は各連の後に付ける囃子詞。千鳥は浜に居てチュイチュイと鳴くよという意味で、この繰り返しが胸にこみ上げてくる郷愁を更に切なくするのです。

江見悦子自選句鑑賞 ⑭

富士の水引く外流し花梨の実

（「砂時計」161）

富士山の山開きが7月1日に行われた。今年から山梨県側から登るルートが有料化となり、通行料を2千円として、無謀な弾丸登山者の事故防止対策を図るものだという。

若かりし頃、家族旅行で逆さ富士の名所である河口湖畔に宿泊した。翌日の早朝、静謐な湖面に神神しくも美しく映えた逆さ富士の姿が、今も脳裡を離れない。

霊峰富士の山肌は火山の噴出物や溶岩流で覆われ、大量の雨や雪が降り積もる。雨水は地中に沁み込み、長い年月を経て伏流水となり、あちこちの地表に湧き出している。掲句はその富士の水を詠んだものと思う。

以前、作者の大学の先輩が富士の麓で農園を営んでいると小耳に挟んだことがある。掲句は、先輩の農園で富士の清冽な湧き水が、外流しに止め処なく流れている光景を「富士の水引く外流し」と、何の衒いもなくさらっと描写し余韻を残している。

収穫した果物や野菜などは太陽の恵みを受け、澄み渡る空気の旨さ、湧き水の旨さはとても贅沢である。

日日多忙を極める主宰にとって、富士山麓の農園は心身のリフレッシュに好適な場所である。

季語となった「花梨の実」、その木陰から風が運んでくる仄かな香りが爽やかである。

（亀田やす子）

雪渓の中より榛の花上ぐる

（「朴の青空」203）

この句から、雪の溶けかかった渓谷の様子が、目に浮かびました。

真っ白な雪。溶けかかった雪の下からは、ごつごつとした黒い岩肌。そしてその中から、鮮やかな紅色の榛の花が一輪。

白と黒と紅の三色の対比に、春先の渓谷の美しさを感じました。

榛の花には、雄花と雌花があるといいます。

雄花は黄褐色で、動物の尾のような形をしています。対して雌花は花穂が短く小さいのですが、一度見ると忘れられないくらい、印象的な紅い可憐な姿をしています。

「花上ぐる」からは、春へのわくわくとした喜びを感じました。

雪解けへの希望。見えないけれど、雪の下で着着と進んでいる春への準備。

渓谷の冬は厳しく、大地は、白く硬く凍てつきます。その分、春の訪れは、すべての生物が待ち望んだ喜びなのでしょう。陽光はキラキラと反射し、ゆっくりと、しかし着実に大地を溶かし潤していきます。

モノクロームの世界からカラーの世界へ、を繰り返す山の一年を想像しました。

（木内マヤ）

令和6年8月25日

第9回 いわき海の俳句全国大会

「俳句を通じていわき市の復興、福島県の復興並びに海の文化を未来に継承する」をスローガンに、今年も「いわき海の俳句全国大会」が開催された。

震災から13年となる今も、海岸近くにはその爪痕が残り、街には線量計が点在する。しかし、防潮堤沿いの防災緑地に植えられた松の幼木は、この間に2mほどに成長していた。

事前投句の選者は、江井芳朗・神野紗希・中西夕紀・横澤放川の4氏。当日句の選者は、江藤文子・高崎公久・山田真砂年の3氏。

事前投句

準賞　磯　波　の　裏　に　表　に　鳰　荻野加壽子
　つばくらめ千の茶畝をすべりくる　小梁洋子

海に関する俳句　江井芳朗　選

入選　万　葉　の　海　に　点　れ　る　蛍　烏　賊　井村和子
　遠泳の列はうねりに乱れなし　沢辺たけし

自由句　江井芳朗　選

入選　母偲ぶ蓬団子を盆に盛り　亀田やす子
　疎開船沈むる海や黙灼くる　中本　清
　海に関する俳句　神野紗希　選
　特選　能登弓手立山馬手に湾涼し　成瀬真紀子
　海に関する俳句　中西夕紀　選
　特選　磯　波　の　裏　に　表　に　鳰　荻野加壽子
　入選　杖置きて海見ゆるまで青き踏む　中條睦子
　　陰浸し竿の先なる荒布引く　曽根　満
　自由句　中西夕紀　選
　特選　つばくらめ千の茶畝をすべりくる　小梁洋子
　入選　早苗田や少し慣れたるランドセル　成瀬真紀子
　　子猫飼ひ母の言葉の増えにけり　阿部　澄
　海に関する俳句　横澤放川　選
　入選　引き絞る網にをどるや桜鯛　神田美穂子
　　磯　波　の　裏　に　表　に　鳰　荻野加壽子
　　しただみに触るる遠き日能登荒磯　南　恵子
　自由句　横澤放川　選
　特選　初夏や湯舟にかをる能登の桧葉　河野尚子
　入選　夕桜家族の数のカツ揚がる　石川裕子
　　早苗田や少し慣れたるランドセル　成瀬真紀子

当日句

山田真砂年　特選

秋高し防災の松我が背越ゆ　成瀬真紀子

（記・成瀬真紀子）

万象ノオト

テーマ『掃除』

庭掃除

那覇　辺野喜宝来

沖縄に移住した26年前から10年前まで住んだ首里の弁が嶽近くに亡夫が建てた家には、小さいながらも数個の岩石と心字池、蹲などを配置した庭があった。途中数年間の県外生活があり、心字池を埋め戻し、所狭しといろんな草花を植えこんだ。生垣や隣家との境の塀には　マンゴーや蕃石榴、茉莉花、月下美人などの花木があった。

彼は忙しい職種の身で、平日の庭掃除は私、休日は彼。小さな庭だが、いざ掃除となると、実に手間も体力も要するものだ。特に草むしりや梅雨時期のカタツムリ退治には苦い思い出しかない。しかし、「マイ庭」をこよなく愛した彼は、ガン闘病中にも庭掃除には精を出していた。彼亡き後、家を売り、彼の愛した庭とも別れた。

鉢底に煙草隠せる四月馬鹿　宝来

アリとキリギリス

札幌　土門　一

そろそろ大掃除の事が気になる季節である。お掃除のプロに言わせると本当は暑い夏に済ませておくのがお勧めらしいが、なかなかそうはいかない。

今年の夏は北海道も生命の危険を伴う猛暑予報とやらで、ついに自宅にクーラーを設置した。札幌生まれの私には初めての導入となったが、あまりの心地のよさにぼーっとしているうちについつい何もせずに過ごしてしまった……という次第である。

まさにアリとキリギリスの話を地で行く展開で、山積みの片付けをしなければならないことに唖然としながらも、妻の怒りの顔も浮かんでくる。

ここは気持ちの良いお正月を迎えるためにもひと頑張りする覚悟である。

「煤払」は年末の季語。みなさん、頑張りましょうね。

日日、そしてその都度

松戸　渡部洋子

掃除の行き届いた場所で過ごすことは快適である。そのためにも日日の掃除は欠かせない。けれど諸事情が起きて出来ないこともある。

怠ると元の状態に戻すのに多くの時間と労力が必要となるものである、浴槽とシンクとその周りは毎日一回必ず実行を心がけている。

さてある日の事、奥歯が疼き歯科医のお世話になった。歯並びの悪いせいで、歯磨きが行き届かず虫歯になったのだ。以来毎食後の歯磨きと、月一度の通院をし、点検して頂くことを続け20年近くになる。お蔭様で八十路の今も20本以上の歯が残っている。

続けて行けたらと願う日日です。

冷蔵庫壊れてからも金を食う

松山　入河　大

最近と言っても8か月くらい前に、

引越しをした。引越しにおける掃除は思いの外大変であった。何といっても狭い部屋に、荷物がたくさんあったからだ。特に、本と雑誌、電気製品が多く、掃除の邪魔となった。邪魔となる物を移動させてから掃除をし、もとに戻しつつやるしかなかった。当面は生活に不要な物から引越し用段ボールへ詰め込んでいった。そんな時、突然、冷蔵庫が壊れたのである。粗大ごみとして、冷蔵庫は捨てられず、有料で廃棄処分とした。おかげで、余計な手間は掛かるし、想定外の出費となった。

引越しの日は、まだ先だったので、めんどくさいと言いつつも、掃除をもくもくと続けたのだった。

掃除の記憶

大阪　入山繁幸

小学校での掃除は窓拭きと床の雑巾がけ。大きな講堂の床を端から端まで並んで雑巾がけをした記憶が強い。

中学では竹箒で庭の掃除。小学校の時のように真面目に掃除することはなく、如何に手を抜くか、サボるかが楽しみであった。担任の先生はそのことは百も承知で、やがてサボっている現場を見つけられお仕置きを食らったことは必然の結末。

昭和30年代の学校では、先生の叱責は父親から殴られることと同じで、悪いことをしたら体罰を受けることは当然の報いだった。今では考えられないが竹箒の長い柄で頭を叩かれ、職員室前の廊下に立たされることくらいは毎度のことであった。

高校に入って掃除がないことに驚き、なんと素敵なことか、大人になったものだと喜んだことを今でも思い出す。

茶工場の掃除

川根本町　鈴木裕一

江戸時代から続く緑茶の生産に定年前から携っている。私の住む静岡県川根本町は、昭和時代は殆どの家に茶工場があり、茶時は村中が新茶の香に満たされる。我が家は昭和中期から数人での共同組合で生産している。

9種類の製茶機により茶葉を蒸し、粗くから優しく揉み、乾燥による茶葉の水分量また温度管理により、飲めるお茶となる。特に昭和時代の機械のため掃除は勿論手間のかかる茶工場である。茶期前後は組合員全員で一日かけて工場と機械の一部は分解して入念な掃除をする。

お茶は「揉む」と言われるように、「揉手の篭」が付いた機械が多く、そこに茶渋が付着、纏り付きその除去、掃除を毎日実施しかなりの労力と時間を要する。火を入れた機械は粉茶の舞う中での掃除で、生産者だけが味わえる香り高き至福の掃除である。

「万象ノオト」投稿募集

▽3月号「テレビ」(11月末日締切)
▽4月号「踏　切」(12月末日締切)
▽長　さ　本文　17字×19行以内
▽投稿先
〒417-0861 富士市広見東本町14―14
神田美穂子

万象作品

江見悦子・内海良太 共選

○は佳句に選ばれました。

宵の夢紡ぎて烏瓜の花　静岡　松永博子
風死すや二百余段の男坂
護摩焚きを待ちたる腕に蚊のひとつ
○太郎とぞ蠅虎に名づけたる
○炎天や伐り倒されし松の黙　札幌　谷　廣司
百合の香や闘病の子の細き腕
胸元を濡し丸ごと桃吸へり
母の忌や紫陽花のあを真つ盛り
水飲んで盆綱曳きへいざ拳　福岡　宮田千恵子
○山笠走る背で息吐く男衆
滝音の聞えて滝のまだ見えず
熱帯夜闇にかすかな風起る
○墨雲の流るる迅さ我鬼忌かな　横浜　星野信子
庭石にこつんと当つる枇杷の種
日盛をひたすら少年は走る
午後三時暑さの籠る台所
束髪や衿元きつく初浴衣　燕　渡辺志ま
雑草の禾の穂出づる晩夏かな
朝風をはらむ作務衣や盆支度
○パオに泊つる夢なほ捨てず天の川

○風鈴や足なげ出して双樹亭　柏　村田由美子
ポンプ井の水ぼこぼこと夏真昼
青ふくべの切手涼しき便りかな
黒雲のみるみる育ちスコール来
○徴払ふ書や青春の哀楽も　佐倉　鈴木隆久
診療所閉づる日近し立葵
室外機うなるビル裏蟻の列
藍染の木綿素肌に今日は夏至
夏旺ん海風受けて大風車　札幌　石田　睦
熱帯夜賑ひ続く繁華街
蟬時雨ひときは響く森の奥
○男爵は引退薯の世も移る
えぞにうの花や辺りをはらひたる
ルピナスの穂の高高と廃坑跡
晩夏光ニセコの森の木の間越し
熊除けの鈴の音消す蟬しぐれ
薄明やラベンダーの丘薄紫
のぼりつめ宙を弄(まさぐ)るクレマチス
少年の宝ものなり兜虫
夏休み鳥獣戯画へ長き列
捕虫網のせて自転車野を急ぐ　札幌　竹重富子
○箒草浮きさうなほど丸くなり
鶺の子の草の根方に横一列
初鰹冷凍便で届きけり　田邊政代
炎天や社に残る土俵跡
花殻を摘みて風待つ夏の夕
素麺に紫蘇和へて焼くレシピかな
仕事終へ夕立浴ぶる帰り道　土門一平
入道雲打ちつ放しのゴルフ場
風薫る送迎バスに児らの声　土門一
師を偲ぶ打上げ終ひの揚花火
○窓際の眠れる猫も夏痩か
○変りゆく地に生家なき帰省かな
切り分くる西瓜に集る小さき手　船橋明美
熱帯夜興奮さめぬ金メダル
桃一顆汁のしたたる掌　和島良一
空の碧溜むる四葩の花の毬
畑うねりゆくじやがたらの花畑
○大雨に避難勧告夏の夜　新庄　曾野部礼子
垂らす足置き所なく夕端居

茶の間越し正座して待つ遠花火

意のままに伸びて揺れたる葛の花　大江　安藤桂花

言の葉の途切れしあとのソーダ水

藤の実の垂れたる庭や父偲ぶ

山あひに音もなく降る夏の雨　安藤桂花

○夕暮の色よりも濃し花葵

汗の顔カタログを手に訪ね来る

細格子に京染の札花石榴　仙台　富田洋子

蚊を打ちて業平の碑を拝しけり

四脚門の乳鋲あからむ緑雨かな

墓になる一坪ほどの草むしり　新潟　榊原キヨ子

梅雨寒や熱湯そそぐカップ麺

さはやかやソファーに母の大欠伸

神木の傾く影や蟬時雨　齋藤　信

路地多き温泉街や雲の峰

○バス停のベンチに秋の団扇かな

ふる里の変らぬ味の冷奴　斎藤ヨシ

渦潮越え玉葱の旅越後まで

高速道工事四年目草茂る

目覚むれば恋歌めける蟬時雨　山田季聴

鳴き果ててむくろの軽き樹下の蟬

青草の髪梳く如き雨後の岸

雨蛙張り付いてゐる風呂の窓　芳賀　稲川清子

山鴉蟬を銜へて飛びたてり

仏壇に母を偲びて紅の花　福武幸子

夏休みこぞりて園舎の窓みがく

かき氷の山をくづせる銀の匙

鳶の輪のふらついてをり炎天下

○先生のブラウスまつ赤夏休み　栃木　飯塚キミ

山麓の蒟蒻畑夏旺ん

回廊に冷茶一服秋海棠

俄雨滂暑の庭を叩きけり　佐野　木村君子

雲の峰サッカーへ子を送り出す

朝採りの長き胡瓜を貰ひけり

向日葵の国道沿ひに背くらべ　齋藤ミチ子

噴水に遊ぶ子供の笑顔かな

蜩の競ひて鳴けり夕近し

○蒲の池大きな夕日沈みけり　仲山さよ子

雲を脱ぐ谷川岳や沢桔梗

水馬を飛び越えてゆくあめんぼう

夕焼けてピアノの音や丘の家　佐野　菟原美穂子
雑誌読む図書館のカフェアイスティー　義本美智江
リズム良き太鼓の園児山車の上　汐見克彦
○大鉢の風知草揺れ陶器店　志木
塵取の塵に紛るる天道虫
帰省子の手に団子虫ころがれり
バス旅の行く手を阻む梅雨出水
雲の峰いだく露天湯白濁り
浮世絵の浪の団扇を煽ぎけり
片蔭に車列の眠る昼下り　森山洋之助
江戸風鈴分別ごみに色を添へ
露天湯に一陣の風鬼やんま　千葉　高田みや子
○父母の記憶あはあは銀河濃し
夜店裏枝にシャツ干す男かな
涼新た槍投げ高く弧を描き
梅干して潮風抜くる母屋かな　酒々井　小林あけみ
風走る千鳥が淵や花蓮
出水川鼈一匹首伸ばす
打ち上る尺玉の上稲光　佐倉　新谷八郎
妻亡くせし男恬淡夜の秋
晴耕に過ぐる残暑や雨読無き
父の日やモンブラン買ふ鳩居堂　佐倉　有泉正夫
○防空壕夏の遊びの秘密基地
背を向けて無心に廻る扇風機
竹皮を脱ぎ一段と高さ増す　杉田富美代
炎昼や蚯蚓Sの字に乾び
日向から日陰にふはり揚羽蝶
梅雨入や列島少し沈みをる　鈴木美根子
思ひ出せぬ事の多きや心太
パソコンの升目に迷ふ蟻ひとつ
唐黍の今食べ頃を背負籠に　立原千代子
朝の田を巡れば稲穂匂ひけり
○田の水の穏やかとなり稲の花
カンナ燃え終戦の日を想ひ出す　米田敏子
草笛や少年少女坂登る
夏の日や絵皿の紫かはきたる
金木犀盛りの家に人は無し　船橋　山口秀吉
秋の蚊に血を吸はれたる五階かな
日本も亜熱帯かやこの暑さ
電車待つ上りホームの二重虹　柏　鹿毛満子

杖の音一歩一歩や朝曇　安藤美酒々（東京）

三十回腕立て伏せや夏木立　一由久美子

緑蔭や美声の男二人連れ　石川幸子（松戸）

ペンを置き水飲みてより昼寝かな　菊岡緋路

○鬼灯の天辺裂きて覗きけり　大場八朗

ゆつくりと潮満ちてゆく夏の海　齊藤孝夫

太陽光パネルのまぶし稲の花　高野翠子

捩花のねぢれに沿うて蟻登る　鶴田智美

○葛の香ややつと眠りし子の重み　寿多映子

草刈の匂ひ漂ふ線路かな　中森ひろえ

跡継ぎの絶えて蚊帳吊草の波　渡部洋子

かなかなの声にかさなる「またあした」　奥澤よし江（市川）

コンサート終れば森の良夜かな　北口富栄

夕暮の木槿にあづけけふの夢　齊藤孝夫

初蟬のしどろに届く朝の卓　高野翠子

なつかしき人の面影沙羅の雨　鶴田智美

届きたる米寿の兄の夏野菜　奥澤よし江（市川）

○奥入瀬の岩ことごとく滴れり　北口富栄

花茣蓙や黒潮の風ほしいまま　齊藤孝夫

たちまちに一山揺す蟬の声　高野翠子

人心地つくのは深夜熱帯夜　安藤美酒々（東京）

夏負けて古漬物の茶漬かな　一由久美子

蒂強き高原トマトの味の濃し　大場八朗

白百合の青きめしべのぬらぬらと　菊岡緋路

杉の香の行者道ゆく黒揚羽　寿多映子

○錫杖の子らの問答山開き　渡部洋子

七町会神輿連合大渡御　中森ひろえ

渡御列の先頭神主緋の衣　奥澤よし江（市川）

御神輿やわつしよい見る人かつぐ人　北口富栄

やんちや顔脱ぎて無邪気な子の昼寝　齊藤孝夫

老若の跳人軽やかねぶた祭　高野翠子

新札でもらふお釣りや涼新た　鶴田智美

神輿揺れ鳳凰を猫睨みつけ　大場八朗

白シャツの首筋伝ふ一滴　菊岡緋路

五輪の夏駅の階段ひとつとび　寿多映子

夏深し電話の声の京なまり　渡部洋子

亡き人に告げたきことや夕焼雲　中森ひろえ

再読の本は三冊秋隣　奥澤よし江（市川）

夏空やむづかる子供の声高き　北口富栄

駅ビルの頭上に上る入道雲　齊藤孝夫

読経終へ本堂出れば油照
門前に客待つ力車秋立つ日　東京　中澤桃子
夕虹の高層ビルを跨ぎけり
睡蓮のひとかたまりや池の面
初生りのでかい茄子を先づ供へ
○水蓮の間に揺れをり空の紺
知り人の裏の顔見る網戸ごし　長谷川信也
風鈴の下の短冊芭蕉の句
盆過やなにやら広き家の中
○いつとなく山が真近になつて秋
万緑の上野や絵画集結す
眠るのかもう起くるのか合歓の花　馬場美智子
空中歩道万緑の先摩天楼
朝採りの胡瓜がぶりとまるかじり
田を植ゑし水面に映る青き山
七回忌読経の響き夏空へ
きゆうと鳴き割かれ煮込まれ鰡鍋　平子甲奈
○手をつなぐ少女速足プールの日
日曜日ホコ天流す風鈴屋
スケッチの籠に溢るる夏野菜
重ねたる戦後のいのち夏の夜
潮騒と潮風過ぐる昼寝覚
○赤蜻蛉王家御殿（ウドゥン）の垣高し　調布　荒井　仁
万座毛夏蝶海の空好み
三線に手振り身振りや洗ひ髪
幼弾くピアノの音色夏始　三鷹　南場雅子
コンビニにうろうろしたる猛暑の日
梅雨さ中急流濁る車窓かな
垣根沿ひ定家葛の薫る道　府中　竹村晃子
レースのごと玉章の花ナイトショー
葉生姜の酢漬のうまき夕餉かな
大青田坂東太郎真ん中に　日野　松原悦子
○雲海に富士の大影九合目
龍飛崎晩夏の小石穴持てり
機嫌よく雨に打たるる額の花　青梅　横井一美
緑濃き屋敷林から黒き猫
とりどりの女子高生の扇風機
○七島の蒼き連なり青葉潮　横浜　大駒泰子
店頭に袋詰めされ茗荷の子
緑蔭のベンチ定席老二人　松本幸男

青き尾の日差しに光る蜥蜴の子　横浜　岡　元枝

朝日差すブロック塀に蟬の殻　加藤和子

亡き人を偲ぶ夕べや月見草　坂本具子

紫の小花いつぱい竜の髭　柴田雅春

雨上りを待ち一斉に蟬の声　長野高朋

青葡萄見上げて別れ話聞く　森　桂子

荒れ庭に白さるすべり咲き初むる　豊　美佐子

オリンピックの喚声聞ゆ原爆忌

秋暑しハチ公像に並ぶ人

春驟雨ホワイトデーの品提げて

硝子越し逆毛を立つる猫の恋

名園の入口狭し竹の秋

父の日や詩吟を好む父なりし

山行きや先頭きつて夏帽子

到来の桜桃ひとつ皿の上

七夕や子と触れ歩く笹飾り

療養の弟励す夜の秋

母に送る団扇の風やはや寝息

多摩川の膨んでゐるつゆの明

日の中の乳白色の夏椿

夏草や離島に友と猫二匹　川崎　横山ユキ子

クーラーの排気に草木揺れどほし

○玄関の隅に極暑の試歩の杖

ハンモックの心地よささう木木の影

雲海や富士五合目の握り飯　茅ヶ崎　久保田富士子

○白黴のバスケットボール子は父に

梅干して夜空に託す三日かな

青葉雨ふくみて土の匂ひたる　大和　中谷由郁

赤き爪グッチマークのサングラス

虹の端薄れて遠き空の果て

摩れ合うて風となりたる笹涼し　伊勢原　山本カツ子

○牛鳴くや干草匂ふ風の向き

火取虫がつりと掴む鈴の網

老鶯や調子はづれのソプラノで　松田　古谷悠紀子

夕菅の星の数ほど姉の墓所

待ち伏せの藪蚊払ひつべリー摘む

アイスキャンデー手に手にレジの列長し　静岡　飯田優子

銈介の三和土にひとつ蛾の果つる

空晴れて玻璃に映れる百日紅

鬼百合の灯る峠の馬頭尊　伊東文恵

夏旺ん舳先に届く水の照り　静岡　内藤允昭
風を聞き波を聞く朝棕櫚の花　永田公香
○炎天や富士の輪郭歪みたる　海野俊彦
人気なき工事現場に夏の月　杉田義則
球場にアナウンサーの声涼し　高井明子
青田波鎮守の杜の銅の屋根　高橋一夫
○堂涼し富士曼荼羅の水垢離絵　筑地裕子
片かげり岩塩舐むる孕み牛
店先の目高大きも小さきも
車座の真中に落つる花火屑
炎昼やゴミ収集のオルゴール
枕辺へいつも置きけり古団扇
合歓の花雲の高さに触るるほど
初蟬や地を歩きつつ翅震ふ
敷石を数へ跳ぬる子夕焼かな
翠巒に白雲靡く夕かな
待合の窓より眺む夏至の雨
蜻蛉追ふ子の長靴の脱げしまま
○玉の汗奔引きずり来る女
子燕の影を追ひかけ児の駆くる
雨上り隣りの婆の草むしり
髭先で行く先探る御器かぶり
○盆のもの菰巻にして供養かな
溝浚へ鋤簾を肩に男衆
でで虫の角突き上ぐる一センチ
○夏の日や茅葺き住居燻蒸中　野﨑浩子
雲の峰富士と高さを競ひ合ふ
夏草の被ふ山道迷路めく
信号の変り日傘の人となる
水口の砂を浚へり田植時　長谷川洋子
泉水の蓮開きをり武家屋敷
棚経の僧門口に一礼す
百日紅見あぐる空の青さかな　矢野喜久江
暑き日や登呂の遺跡に煙一条
墓参手押しポンプの重きかな
退院の深き眠りや花むくげ　焼津　小梁洋子
故郷へつながる海や雲の峰
夫の席空きしままなり居待月
凌霄花の棕梠の高みを昇りをり　掛川　鈴木美由紀
炎帝や「氷」の旗に人の列

手枕の昼寝の父に風送る　川俣町　鈴木裕一

○七夕竹平和の文字の多きかな

冷し酒喉に通して無口なる

夕立やペダル踏み込む女学生　金沢　上野冨貴子

あはあはと紫陽花明り夜の小道

耐へ難き気温やうやう更衣

十薬の昏れて白白庭に満つ

夜の闇咲ききつて散る大花火

奥能登へ月うつる海続きをり

夕暮の帰宅の道の鳳仙花

ほろほろとまたたき消ゆる花火かな

糸の先揺るる天蚕うすみどり

睡蓮の紅のとがりて雲の上

角打ちの漢無言のビールかな

八ミリに残る破顔やすいか割り

夕凪やあさぎまだらの翅休め

豌豆の蔓の勢ひや空の紺

青田風散居の里を一色に

我が舌の塩梅良しと茄子漬くる

厨事西日まともに寺住まひ　廣田宏美

○加賀蔦の伸びきる手足尾山祭

池の面を風切る早さ燕の子

浄土への扉のやうに蓮巻葉　金沢　松田好子

夜の虫網戸へ腹をすり寄せ来

老鶯の声遠近に山の墓地

白南風やすつくり高き銭五像　宮崎恵美

○手織機日に三寸の夏の帯

おつむりに菖蒲結へて初誕生

朝の地震芒種の畠の支度して　かほく　能任康子

震災の瓦礫の撤去走り梅雨

快晴や表日本に雹降るも

復興の太鼓奉納浦祭　白山　朝倉みゆき

熱帯夜水を摂れよと子のメール

満目の木木の緑を全身に

少年の飛せるバイク青嵐　鶴尾正江

ラベンダーの紫の風香をはこぶ

昼顔のしぼみて夕の電車過ぐ

紫陽花の毬の彩り手水鉢　珠洲　井端久子

本堂の窓へ押し寄せ額の花

紫陽花の径抜け来り知らぬ子と

風死すや強力座して荷をおろす　敦賀　川口和代
木道を荒息強く歩荷行く　為永香日枝
宵涼し佳境に入りしショパンの音　徳島　池田やすし
小気味好く鰹切る音も祇園かな　林　早苗
田水沸くたんぼアートの龍吼ゆる　山本晴美
炎暑来る昼餉の馳走ひつまぶし　山本瑤子
○子燕や振返らずに空の奥　小松島　田上幸子
緑蔭を切り裂き進む風の船
豆鯵の目玉に宿る海の風
観音の千の手ありや柿若葉
寺訪うて笑顔の僧の薄衣
モラエスの墓に優しき緑雨かな
朝涼や鳩が寄り来る精米所
新しき扇子開けるバスの中
○初物の酢橘惜しげもなく搾る
瞳大き夢二の女白木槿
デザートは庭の木苺誕生日
蓮の葉に雨粒育ち転げをり
遡るラジコン船や雲の峰
幼子の耳塞ぎ待つ大花火
チャイム押し逃ぐる腕白梅雨晴間
土壁をねぐらとしたる蝸牛　松山　入河　大
枝咥へ鴉のもぐる椎の花
赤黒き爪を残して蟹果つる
昼休み休むことなく蟻の列　門川町　請関ゆかり
夏空へ飛び出すボードパリ五輪
通学路沢蟹の子の横断中
仰向けの鬼虫の肢天を掻く　国富　山口孝治
鉢皿に半身ひたる青蛙
莫蘆の上家族五人の遠花火
一日に二人の訃報白芙蓉　福岡　園田清子
夏休み遊びほうけし昭和の子
願ひごとただ二言や星祭
菩提樹の花孫文の書の重み　鶴田輝代
最先端の万田坑跡草茂る
○父と交す手旗信号夏の川
片蔭に連呼を止めて選挙カー　那珂川　髙山ひさ子
お参りのあとは蜜豆三姉妹
炎昼や猿に注意と広報車
蜘蛛の囲を払ひ郵便箱覗く　沖縄　稲嶺有晃

古稀過ぎて団扇の風に親めり　辺野喜宝来

ガジマルに近づき日傘たたみけり　大城末治（那覇）

鳶の声涼し御嶽（ウタキ）のきざはしに　玉城玉常（沖縄）

蜘蛛の囲へきらきら雨の雫かな　宜野湾　宜野　顕

首里杜や風に遅れて夏落葉　森尾　舞（ベルリン）

○マーチングの列を驟雨のよぎりけり

濃く淡く満つる日の斑や百日紅

向日葵を活けて三畳明りかな

己が幹抱く気根や蟬時雨

靴底の毀るる拝所（イベ）の酷暑かな

苔の花御嶽岩根のしづもりに

土用灸オリンピックの話など

井戸端に大蛸捌く島の海女

男一人来て七夕の墓掃除

○千秋楽汗拭く座長の目に涙

目を凝すはるか都会の遠花火

梅を干す長屋の路地の軒下に

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年 11月号

特集 俳句の「物語性」
○俳句における「物語性」とは何か　堀切克洋
○私が選ぶ「物語性」を感じる俳句　瀬間陽子　西村麒麟
○「物語」を意識して詠んだ句　堀本裕樹　金子敦　髙柳克弘　佐藤文香

特集 俳壇タイムスリップ ～あの日あの時あの場所で
●初の女性主宰誌「玉藻」誕生　小野あらた
●日野草城 連作「ミヤコ・ホテル」論争　伊丹啓子
●新興俳句弾圧事件　栗林浩
●桑原武夫「第二芸術」論 勃発　田島健一
●NHK俳句の始まり　蜂谷一人
●3・11～俳句は時事を詠めるのか　関悦史

〈グラビア〉俳句界NOW　川上良子

【注目の句集】　植田密『志花』　古澤宜友『月山』

「俳句界」投稿欄　一流選者11名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森　お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句カレンダー掲載句自註

令和6年版俳人協会『俳句カレンダー』に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたしました。

越後線頭上を過ぎぬ竹瓮舟（11月）　髙橋ひろ

もう、とても古いことで、私一人だけだったのか、連れが居たのかさえ忘れてしまいましたが、たぶん昭和の30年前後のことかと思います。何とはなしに信濃川の堤を歩いていたら、その頭上を越後線のローカル列車が通過した、というだけのことなのです。

けれどもその時、私が目を向けていたのは、通過する列車ではなく、橋脚の周りに置かれていた「竹瓮（たっぺ）」でした。漁師さんが煙管を咥えて、竹瓮を漁舟へ積み込んでいるのです。只それだけです。夕昏というにはまだ早く、信濃川の水は波音も無く、凪いでおりました。

「竹瓮」という呼び名は、後に歳時記で知りました。竹瓮を見たのは、後にも先にもこの時一度きりでした。

俳句を知って七十余年。まだまだ修行が足りません。

俳句

巻頭作品50句　正木ゆう子
作品21句　若井新一・櫂　未知子

11月号予告

10月25日発売
予価1,300円（本体1,182円）⑩

第70回 角川俳句賞 発表！

受賞作「熊ン蜂」50句……若杉朋哉
受賞のことば／候補作品15篇
選考座談会 仁平 勝×対馬康子×小澤 實×岸本尚毅

句集特集
日本の俳人100
柴田多鶴子句集『桐箱』

特別レポート 第27回俳句甲子園全国大会

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

万象作品の佳句

内海良太

太郎とぞ蠅虎に名づけたる　静岡　松永博子

「蠅虎（はえとりぐも）」は、素早い動きで蠅を捕まえるというが、その瞬間を見たことはない。昔から益虫と聞いていて、よく見ると目に愛嬌がある。松永さんはこの蜘蛛を太郎と名付けて親しんでいる。「今日も太郎が出てきたわ」と、小動物に向ける眼差しが優しい。

炎天や伐り倒されし松の黙　札幌　谷　廣司

この松は蝦夷松だろう。樹齢も古く高さも30メートルにも及ぶどっしりした姿は神神しくも見える。この地も開発が進んでいる。今日も蝦夷松の大木が次次と伐採されている。横たわる松の静けさが印象的だ。

山笠走る背で息吐く男衆　福岡　宮田千恵子

7月1日～15日、福岡市の櫛田神社の夏祭りの「博多祇園山笠」での嘱目。祭りの最終日は太鼓の合図で5分毎に山笠が次次に走り出し、4キロ余のコースタイムを競う。どの山笠の男衆も膝に手を置きハアハアと背で息をしている。

墨雲の流るる迅さ我鬼忌かな　横浜　星野信子

7月24日、小説家芥川龍之介の忌日。亡くなった年の昭和2年は1月から私的で混沌とした問題に悩まされていた。この辺りが「墨雲の流るる迅さ」に象徴されているのだろう。葬儀の日はことのほか暑さが厳しく、会葬者は誰もが汗だくだったという。

パオに泊つる夢なほ捨てず天の川　燕　渡辺志ま

このパオはあのモンゴル遊牧民の住居のことか。句から察すると、渡辺さんは若い頃に遊牧民の研究をされていて、実際にあのパオで遊牧民の生活を体験したいというのが夢だった。旅のパンフレットでしか知らない私などは、パオの傍らで満天の星を眺めたいものと思っている。

風鈴や足なげ出して双樹亭　柏　村田由美子

双樹亭とは文化文政の頃、流山市の地で味醂で財をなした秋元双樹の屋敷跡。小林一茶はパトロン的な秋元双樹を全面的に頼り、双樹亭には足繁く51回も訪問している。

双樹亭は今、一茶の双樹記念館として一般に開放されている。庭園も綺麗に整備されていて、記念館見学の後の休憩には恰好な設えとなっている。風鈴の下で足を投げ出しているのが一茶風でいい。

徽払ふ書や青春の哀楽も　佐倉　鈴木隆久

書籍や日記などを土用干にして徽を払っているのだろう。個個の書にはそれぞれ思い出が詰まっている。学生時代の資料や青春時代の哀楽の詰まったもの、書き込みや傍線など、徽を払いながらまた読み直し、青春時代が懐かしい。

これより三句入選からの佳句

変りゆく地に生家なき帰省かな　札幌　船橋明美

都市も村も日替りのように変化している。生地が区画整理

にあえば古い記憶にあるものはどんどん失われていくのが現代の様相のようだ。作者の気持が強く伝わってくる。

大雨に避難勧告夏の夜　新庄　曾野部礼子

梅雨時の最上川、今年も集中豪雨があって3年前の洪水を思いだす。あのときの洪水は大石田の斎藤茂吉の聴禽書屋も水浸しになった。曾野部さんの新庄はもう少し下流だが避難勧告があって、避難所で夜を過ごしているのだろう。温暖化の影響にはやり切れない思いがする。

バス停のベンチに秋の団扇かな　新潟　齋藤　信

「秋の団扇」も「秋扇」も同じ本意。このバス停に誰かの好意で団扇が置かれている。暑い盛りにはバス待ちの人が大いに利用したが、秋になってベンチの団扇もやや綻びてきた。竹筒に差してある2、3本の団扇、団扇の絵も古びてきた。即物的な句で景が見えてくる。

先生のブラウスまつ赤夏休み　栃木　飯塚キミ

一気に夏休みに入った感じがする。いつも地味目の年配の先生だが、真っ赤なブラウスがよく似合う。俳句は即物的な表現が有効というのがよく分かる。この句も即物的でいい。

奥入瀬の岩ことごとく滴れり　市川　奥澤よし江

十和田八幡平国立公園の奥入瀬渓流を旅されたのだろう。14kmの渓流では豊かな流れや様様な奇岩の渓谷美が美しい。暑い都会からは別世界である。

玄関の隅に極暑の試歩の杖　川崎　横山ユキ子

リハビリに用意した杖も、こう毎日の暑さでは外へも出られない。杖は玄関の隅に立て掛けてもう2週間にもなる。早く涼しくなればと、ご同情申し上げる。

盆のもの菰巻にして供養かな　静岡　内藤允昭

盂蘭盆会が終わって精霊棚に供えた供物や飾り物を菰に巻いて供養したというもの。昔は菰巻にして川に流していたが今は河川法で禁じられている。時代が変わっている。

夏の日や茅葺き住居燻蒸中　静岡　永田公春

古い茅葺住居の燻蒸中とは珍しい光景。燻蒸剤でガスを発生させ茅葺きの病菌や害虫を除去するのは夏場が適しているのだろう。茅葺きの住居の維持は大変ということが分かった。

加賀鳶の伸びきる手足尾山祭　金沢　廣田宏美

金沢の百万石まつりの期間中、金沢尾山神社ではいろいろな伝統行事が行われる。加賀鳶が出ての梯子乗りもその一つ。梯子の天辺で手足を差し伸ばす芸は見事。袢纏を着た加賀鳶の木遣り歌が聞こえてくる。

子燕や振返らずに空の奥　遠島　池田やすし

一人前に飛べるようになった燕の巣立。毎日成長を見ていた者にとっては、振り向きもせずに素っ気なく飛び去っていってしまったのは、やや寂しい感じがする。保護した鳥獣を放つときも、一気に立ち去ってしまうシーンをよく見る。

マーチングの列を驟雨のよぎりけり　那覇　辺野喜宝来

演奏をしながら整然と行進する列に突然の驟雨。見物衆は、「おっと大丈夫か」と見ているが、マーチングの列は乱れることもなく行進する。沖縄の驟雨は明るい、色彩感のある句だ。

新中央句会報（8月例会）

令和6年8月25日（日）本郷 男女平等センター
（出席23名）

江見 悦子 主宰選

庄屋門ごろりはみ出す大南瓜　南雲 秀子
置物となりしピアノや秋の風　奥 太雅
蜩の声に日暮の早くなり　内海 保子
蠟涙の凝れて累累八月尽　三屋 英俊
息絶えし玉虫色を失はず　塗木 翠雲
盆過ぎの畳酢水で拭きあぐる　内田 郁代
遅れ来し人のせはしき秋扇　榎本 文代
どろどろと下座の太鼓や夏芝居　中村 千久
震度三の揺れにも慣れて金魚玉　内海 良太
金の眼の般若の面秋のこゑ　一由久美子
四阿に次の風待つ残暑かな　下嶽 孝一
㊟遠投の槍に秋風生れけり　塗木 翠雲
㊟遠投の槍に秋風生れけり　塗木 翠雲

「遠投」はボールなどを遠くに投げること。「遠投の槍」と来れば、この夏のパリ五輪槍投げの決勝戦、見事に65ｍを超えた北口榛花の力投が思い浮かぶ。猛暑に加えて自然災害や社会問題続出で気持が上向かない中での遠投に日本中が湧いた。彼女の満点の笑顔も良かった。壁に穴が空き、そこから秋風が生まれたような爽快感のある句。オリンピックを離れた、独立句としても読むことが出来る。

庄屋門ごろりはみ出す大南瓜　南雲 秀子

庄屋門とあるので、旧家の構えを守っている屋敷である。正面の門から蔓がはみ出し、大きな南瓜が転がっている。今は使われない門なのか、昔の庄屋も今は南瓜作りに精を出している。「ごろり」が俳諧味たっぷり。

金の眼の般若の面秋のこゑ　一由久美子

「秋のこゑ」とは、秋の気配を声に喩えた季語。音ばかりでなく、しみじみとした秋の趣をも言う。

能面である「般若の面」は、女性の嫉妬と恨みを表現した怨霊の面。額には二本の角が生え、ひそめた眉の下の眼は金色、瞳孔の部分にだけ穴が開いている。かっと開かれた口には上下の歯と二対の牙があらわ、鬼女の表情である。そんな般若の面の金の眼に秋の気配を感じた作者、どこまで「金の眼」の凄みを感じ取れたか、興味が募る。

内海 良太 名誉主宰選

あぶれ蚊や俳誌の山の崩れより　江見 悦子
邯鄲や夢で逢ふ人みな若く　松井 宣夫
新涼や木彫りの髭の薬師仏　大久保 進

遠投の槍に秋風生れけり　塗木翠雲
灯の点かぬ隣家の庭に虫の声　小池清晴
盆棚の隣りの部屋の寂しかり　内田郁代
遅れ来し人のせはしき秋扇　榎本文代
身にしむや仕置場跡の法華塚　三屋英俊
島唄のゆるき調べや仏桑花　塗木翠雲
兄弟の仲良き頃のソーダ水　松井宣夫
手花火の後ろの闇の深かりき　中村千久
㊖四阿に次の風待つ残暑かな　下嶽孝一

㊖四阿に次の風待つ残暑かな　下嶽孝一

庭園などを歩いて、よく四阿で休憩させてもらう。四方吹き抜けなので風の通りはいい。先程までのいい風がピタリと止まってしまった。こんな時の心境が言い得て妙。「次の風」が生きている。

手花火の後ろの闇の深かりき　中村千久

手花火に照らされて楽しそうな子供たちの顔や浴衣姿が見える。手花火の本意はそんなところにあるが、一歩下がれば物事は裏と表。その中でもアッという発見と意外性は、常に詩に求められている。深い後ろの闇の発見。

邯鄲や夢で逢ふ人みな若く　松井宣夫

やっと虫の秋になってきた。寝苦しさから解放され、見る夢も人恋しさになっている。夢に出るのは大方は故人だが皆若若しい。人生の儚さを中国の故事「邯鄲の夢」に重ねた。

中村　千久　選

秋風が四角く過ぐる桜田門　内海良太
少年の真白の指ぞ蟬生る　砂地宏子
あぶれ蚊や俳誌の山の崩れより　江見悦子
喪の帰り車待つ間の虫時雨　桔梗　純
遠投の槍に秋風生れけり　塗木翠雲
老兵に深き銃創終戦日　松井宣夫
盆過ぎの畳酢水で拭きあぐる　内田郁代
旅客機の空を見上ぐる敗戦日　島野ひさ
島唄のゆるき調べや仏桑花　塗木翠雲
団子屋の婆店仕舞ふ八月尽　村田由美子
窓を打つ雨の向かうの夕焼空　沢辺たけし
㊖四阿に次の風待つ残暑かな　下嶽孝一

㊖四阿に次の風待つ残暑かな　下嶽孝一

帆船の時代に、順風を待って港で出航を待つことを〝風待ち〟と言った。炎天を来て、四阿で休憩をしている掲句にある人も、再び残暑の中に出て行かなければならないのだろう。「次の風待つ」という気分がよく分かる一句。

秋風が四角く過ぐる桜田門　内海良太

江戸城の南を守る「桜田門」は、内堀通りに向かっている。

お堀の向うには警視庁の建物があり、幕末には桜田門外の変があった。その門をいまは「秋風」が吹き抜けている。それを「四角く過ぐる」と捉えたことで、他の城門にはない雰囲気を伝えている。

島唄のゆるき調べや仏桑花　塗木翠雲

「島唄」は奄美・沖縄などで歌われる民謡。西洋音階のファとシの無い〝ヨナ抜き音階〟で、三線などに合わせて、南国のねっとりとした風の中を流れているのだ。「仏桑花」（＝ハイビスカス）の季語が、南西諸島の気分を弥が上にも盛り上げている。

榎本　文代　選

秋風が四角く過ぐる桜田門　内海良太
あぶれ蚊や俳誌の山の崩れより　江見悦子
赤黄のおしろいとりわけ黄の匂ふ　江見悦子
盆過ぎの畳酢水で拭きあぐる　内田郁代
秋風や家紋の透くる釣灯籠　一由久美子
どろどろと下座の太鼓や夏芝居　中村千久
一匹も掬へずと言ひ金魚飼ふ　奥　太雅
白きものばかり干さるる野分あと　内海保子
島唄のゆるき調べや仏桑花　塗木翠雲
吊橋を潜り青鷺カヌー追ふ　南雲秀子
手花火の後ろの闇の深かりき　中村千久
㊖八月や昭和史上下卓の上　内海良太

㊖八月や昭和史上下卓の上　内海良太

暦の上では晩夏から秋へと季節が移る8月。暑い中にも秋の気配が感じられる。しかし昭和という時代を顧みると、6日、9日は「原爆の日」、15日は「敗戦の日」として歳時記にも載っている。卓の上に置かれた2冊の『昭和史』（半藤一利著）が重たい8月を伝えている。

赤黄のおしろいとりわけ黄の匂ふ　江見悦子

白、赤、黄、絞りなど白粉花の色はいろいろ。庭先や路地に咲いて庶民的な雰囲気がある。白と赤はやさしい香り、黄色は甘く濃い匂いのよう。

盆過ぎの畳酢水で拭きあぐる　内田郁代

祖霊を迎えるお盆は、支度にも来客の接待にも忙しい。盆の三日間が過ぎて日常が戻って来た日の畳拭き。「酢水」がすがすがしく、丁寧な暮しぶりが見えてくる。

今後の新中央句会の予定

▽11月24日(日)　東京文化会館　小会議室　13時より
▽12月22日(日)　東京文化会館　中会議室　13時より

ルビーの小函　(11月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

5　統ぶる (すぶる)
12　秋没日 (あきいりひ)
　海霧 (じり)
　虎杖 (いたどり)
　煙き (けむたき)
　静寂 (しじま)
13　蝦夷萱草 (えぞかんぞう)
　皂莢 (さいかち)
14　項 (うなじ)
　強張る (こわばる)
　背 (せな)
15　貉藻 (むじなも)
16　新田 (にった) *栃木県の地名
　武尊山 (ほたか)
18　鮴 (えり)
　復習ふ (さらう)
　汀 (みぎわ)
19　滑莧 (すべりひゆ)
　榎の実 (えのみ)
　反る (かえる)
　日日花 (にちにちか)
20　轡 (くつわ)
　徒士 (かち)
22　昨夜 (よべ)
　姥子 (うばこ) *神奈川県の地名
23　燻し (いぶし)
24　男郎花 (おとこえし)
　掃苔 (そうたい)
25　竿秤箸 (おがらばし)
　猩猩 (しょうじょう)
25　蜑 (あま)
26　喉 (のんど)
27　晩稲 (おくて)
　東 (ひんがし)
28　毀つ (こぼつ)
　添水 (そうず)
29　海鞘 (ほや)
30　標縄 (しめなわ)
41　紬毬花 (てまりばな)
45　天蚕 (やままゆ)
　肌理 (きめ)
49　鳴 (かいつぶり)
52　蠅虎 (はえとりぐも)
　黙 (もだ)
　禾 (のぎ)
53　掌 (たなごころ)
55　髄 (すっぽん)
56　跳人 (はねと)
57　万座毛 (マンザモウ) *沖縄の景勝地
　玉章の花 (たまずさのはな)
58　銈介 (けいすけ) *芹沢銈介・染色工芸家
59　翠耕 (すいらん)
　勦絶 (じょれん)
60　勢ひ (きおい)
　塩梅 (あんばい)
　遠近 (おちこち)
61　酢橘 (すだち)
66　面 (おもて)
　四阿 (あずまや)

東西南北

消息等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句「くぢら」9月号に

四五人もゐれば撃合ひ水鉄砲　良太
茹でられて蚕豆黒き口結び　悦子

「たかんな」9月号に

をちこちの空の爛漫花疲れ　悦子

「初蝶」9月号に

花朧温顔のまま逝かれしか　悦子

「俳壇」9月号「俳壇プレミアムシート」に中條睦子氏の「流れ星」5句

犀星の小さき虫籠素風かな
父よりの文に敬語や盆の月
流れ星能登の一村寝しづまり
星空の星のしづくや芋の露
天高し草色滲むスニーカー

○作句信条

若い時は日常から離れ新しい発見、感動を求めて旅に出た。このごろは自然との交感は日常の生活の中でも可能であると思うようになった。日常の生活にも季語を活かす事で、より深い思いを句にすることが出来る。

○我が師の一句

過ぎし日のしんかんとあり麦藁帽　中山純子

○自身の一句

黄落の奥なる地獄極楽図

道後温泉本館全館営業再開・改築130周年記念第59回子規顕彰全国俳句大会

本井　映　特選

初音かな釦が穴を潜る時　神田美穂子
木下節子　選
ゲラ刷りに付箋三枚文化の日　荻野加壽子

第8回静岡県俳句協会新人賞を杉澤修氏が受賞　静岡県全体の俳人の交流を目的としており、応募資格は「俳歴10年未満」

普段着のままの参詣初雀
春禽の声頻りなる勅使門
海へ向く羅漢の背ナに春日影
満点星の芽吹きに万の雨しづく
雑踏に托鉢僧の鉦涼し
牛丼をかき込む球児夏旺ん
秋霖や貨車の引き摺る闇深し
霧霽るる桧山を鳶の掠めをり
杉の秀を鴉鳴き合ふ秋土用
星ひとつ残して果つる冬茜

俳人協会「第63回全国俳句大会選句集」より「万象」の入選は左記の通り

（応募数11、185句　予選通過939句）

古賀雪江　特選

井上弘美・野中亮介　選

倒壊の伽藍を高く帰る雁　井端久子
栗田やすし　特選・仲村青彦　選
うりずんの風艶やかに陶器市　宮城　勉
角谷昌子・谷口智行・西山　睦　選
救援のヘリ冬虹を抜け来たる　井端久子
古賀雪江・鈴木しげを　選
能登からの塩の封書や二月尽　岩﨑武士
坂本宮尾・三村純也　選
箱型の家建並ぶ秋の暮　井端久子
西山睦・蟇目良雨　選
冬蜂の蕊にまるごと身を埋め　井端久子
佐怒賀直美　選
土手の穂を手折り日永を帰りけり　杉澤　修
村上喜代子　選
大試験終へてピアノをたたきをり　売野　緑
角谷昌子　選
膝掛を猫に分ちてランプ売　前田貴美子

＊万象の予選通過者14人、予選通過句27句

（報・編集部）

令和六年度　「万象」全国俳句大会　作品集

ご挨拶

令和6年度「万象」全国俳句大会作品の応募作品は715句、昨年とほぼ同規模の作品が全国から寄せられました。投句されたすべての俳句を作品集としてお届けします。

特選句については、選評が付されています。同人・会員を問わず、沢山の句の中で自分の句を見直す、絶好の機会です。どうぞゆっくりと鑑賞し、句会等でも話し合って下さい。

なお、投句作品には新作をお寄せください。毎月の「万象」誌投句は勿論のこと、大きな句会に出したそのままの作品は避けたいものです。「いま、ここ、われ」を詠んだ句を期待しています。

受付、校正、選者や印刷所とのやり取り等、全般に亘って、千葉県支部の皆さんにお手伝い頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

毎月、「万象」誌上でお会いできることを楽しみにしております。皆様の一層のご健吟を祈ります。

令和6年11月1日

万象俳句会主宰　江見悦子

大会作品集　目次

ご挨拶　江見　悦子 …… 2
内海　良太名誉主宰選 …… 3
江見　悦子主宰　選 …… 4
小林　愛子名誉顧問選 …… 5
中村　千久　選　福島せいぎ　選 …… 6
柳澤　宗正　選　曽根　満　選 …… 7
林　陽子　選　亀田やす子　選 …… 8
沢辺たけし　選　下嶽　孝一　選 …… 9
榎本　文代　選　神田美穂子　選 …… 10
中條　睦子　選　前田貴美子　選 …… 11
作品集 …… 12
御礼とご挨拶　中村　千久 …… 31

内海良太名誉主宰　選

12 開かんと香りのもるる蓮の花　伊勢原　佐藤和子
75 盤の跡白き洞門風涼し　足利　大木　茂
128 花蓼の郷に相似る野道かな　札幌　和島良一
175 色変へぬ松や「万象」末永く　横浜　柳澤宗正
178 夏の日を取り込む大地草ロール　札幌　中鉢弘一
183 漆掻百日小屋に自炊して　七尾　谷渡末枝
204 水音の桶にラムネの五、六本　金沢　石川純子
208 声立てて赤子蹴り上ぐ初湯かな　金沢　河野尚子
217 炎昼の波止場の割れ目なゐの跡　静岡　松永博子
222 終戦忌記憶の底のカーキ色　静岡　望月敏男
263 総代の笛にぐらりと山車発てり　佐野　売野　緑
292 窓のなき窓岩灼くる浜の夕　金沢　松田好子
314 八月の月へ女網の美ら飾り　宜野湾　宜野　顕
327 風入れや一向一揆の僧兵図　金沢　中條睦子
330 白山の風の触れゆく青田波　金沢　中條睦子
336 新涼や刃触り指に砥ぎ包丁　大阪　入山繁幸
393 ぶんと来て庭一巡り金亀子　四街道　奥　太雅
407 校庭の白線揺らぐ炎暑かな　横浜　榎本文代
413 残り田に南瓜の花の這ひまはる　柏　鹿毛満子
475 手拍子を合はせ踊の輪の中へ　佐倉　三屋英俊
482 純子忌の主宰と見入る来迎図　金沢　杉本年虹
487 紅花や甕にどつさり茂吉館　酒々井　竹澤竹里
525 梨売りや戸板一枚店として　津幡　河原昭子
568 夏草やかつて軍靴の踏みし跡　四街道　塗木翠雲
637 橋に来て川見てゐたり終戦日　酒々井　小林あけみ
690 手花火の後ろの闇の深かりき　志木　中村千久
701 鳩居堂の匂ひ袋に秋きざす　佐倉　内海保子

【特選句】

252 基地闘争ありし砂丘や合歓の花　金沢　北川禮子

評　この基地闘争とは、昭和27年石川県河北郡内灘村の砂丘の米軍試射場に対する反対運動で内灘闘争とも呼ばれた。この頃多く作られた内灘闘争の俳句は基地俳句の先駆けといわれている。内灘の今は合歓の咲く静かな住宅街になっている。

539 文字小さき昭和の全集夜の秋　日野　喜多尾明子

評　昭和文学全集は昭和40年代に、角川書店や小学館から全36巻とか、50巻の大冊として出ている。唐木順三とか保田與重郎の名前を見ただけでも昭和を感じる。まして「文字小さき」が昭和全体を象徴しているようだ。

591 火を点けて供へし煙草蟬しぐれ　札幌　谷　廣司

評　親しかった知人の墓参だろう。故人は煙草を片時も離さない愛煙家だった。火を点けて自分も一服して、吸い口を墓の方に向けて供えたのである。
じりじり蟬が鳴く木蔭の墓である。

江見悦子主宰選

36 河童忌や小石挟まる靴の底　流山　穂苅照子
47 足裏の貝殻抉る土用波　徳島　村上和義
111 聖橋わたる男の日傘かな　東京　島野ひさ
146 秋暑し小銭に太る小銭入れ　静岡　荻野加壽子
191 偲ぶ日の言葉涼しく拾ひけり　那覇　前田貴美子
237 雲海や富士五合目の握り飯　茅ヶ崎　久保田富士子
252 基地闘争ありし砂丘や合歓の花　金沢　北川橙子
300 炎帝へひれ伏してをり大八洲　静岡　曽根　満
349 光跡に光跡降れり揚花火　静岡　本多ひとみ
412 かけ声の校庭まはる立夏かな　柏　鹿毛満子
422 海亀の首夕波にのびきつて　那覇　中本　清
525 梨売りや戸板一枚店として　津幡　河原昭子
527 利き腕の傷あたらしき晩夏かな　横浜　小林愛子
547 びくりとも山動かざる暑さかな　佐野　島田和枝
551 補聴器にちんちろりんと虫の声　佐野　阿部　澄
561 四つに組み蜥蜴尾を打つ砦跡　金沢　豊田高子
579 神楽鈴舞ふ奉仕者や神楽宿　宮崎　中山芳教
600 ドアノブに残る指紋やそぞろ寒　静岡　加山ひさ子
610 日盛の鴉ざりがに突きをり　東京　三村紀子
617 轟音の機影消え行く雲の峰　東京　安藤美酒々
637 橋に来て川見てゐたり終戦日　酒々井　小林あけみ
672 ガジマルの瘤にからまる蛇の衣　那覇　大湾宗弘
680 蓮の実の弾けて冥き穴八つ　那覇　大城末治
686 蛇口より洩るる水音原爆忌　佐倉　内海良太
696 握りたき父の手沖縄忌に遠く　那覇　稲嶺有晃
707 裏川の風を枕に熱帯夜　佐野　増田幸子
711 夏の果空き家を草が呑み込みぬ　横浜　大駒泰子

【特選句】

136 水馬六方を踏む空の上　佐倉　鈴木隆久

評　「水馬」は、細長い棒状の体に長い中肢と後肢を持つ。青空の映る水面を行く足取りを「六方を踏む」と譬えた。歌舞伎役者が花道から揚幕に入る時、高く足踏みをする演技を指す。空を踏みゆくあめんぼのワンマンショウが面白い。

263 総代の笛にぐらりと山車発てり　佐野　売野　緑

評　「発てり」から、人力で担ぐ「山車」を思い福岡の博多祇園山笠を想像した。祭総代の笛が鳴ると、肩に棒を載せて出発を待っていた祭衆が山車を動かす。「ぐらりと」が実感、山車の重さと豪華さ、祭りの熱気を十分に活写した。

416 七夕や亡き夫の待つ予約席　札幌　落合裕子

評　七夕の夜、空を見上げて夫を偲んでいる作者。時が経っても面影を浮かべてしまう。「予約席」という措辞に、作者とご主人との間の心の通い合いを感じる。純真な夫恋いの句。願わくば、ご主人には気長く席を温めてもらわんことを。

小林愛子名誉顧問　選

4 炎天や揺られて昏き救急車　小松島　岡田あゆみ
37 出来たての茅の輪に風の集まりぬ　流山　穂苅照子
68 原爆忌薔薇ばらバラと崩れ散る　さいたま　山本右近
88 朝風や植田の澄みに逆さ富士　富士　神田美穂子
143 先生の元気な頃や秋夕焼　静岡　荻野加蓉子
179 合歓の花母の形見の櫛に似て　札幌　中鉢弘一
186 ふるさとに戻らぬ決意能登も夏　千葉　喜多恭仁子
205 綿菓子に顔の隠るる浴衣の子　金沢　石川純子
211 声太き瓦職人雲の峰　金沢　河野尚子
222 終戦忌記憶の底のカーキ色　静岡　望月敏男
291 能登瓦傾き留む晩夏かな　金沢　松田好子
301 方程式解けぬ教室風の死す　静岡　曽根　満
345 短夜やベッド周りの文庫本　福岡　園田清子
364 嬬恋の大キャベツ下げ帰り来る　所沢　南雲秀子
371 泳ぎ終へ纏ひし水の重さかな　川崎　大久保　進
395 原子炉の隠るる岬雲の峰　徳島　福島せいぎ
407 校庭の白線揺らぐ炎暑かな　横浜　榎本文代
422 海亀の首夕波にのびきつて　那覇　中本　清
457 病む母の傍らいつもソーダ水　徳島　山本瑤子
540 遠雷や野外劇場幕上る　日野　喜多尾明子
547 びくりとも山動かざる暑さかな　佐野　島田和枝
551 補聴器にちんちろりんと虫の声　佐野　阿部　澄
569 案山子かと見ればすたすた歩き出す　四街道　塗木翠雲
598 鶏頭花何か怒つてゐるやうな　静岡　加山ひさ子
686 蛇口より洩るる水音原爆忌　佐倉　内海良太
700 白地着て銀座ティファニーのぞきけり　佐倉　内海保子
711 夏の果空き家を草が呑み込みぬ　横浜　大駒泰子

【特選句】

248 燕の子落ちんばかりに親迎ふ　静岡　伊東文恵

評　燕の子が巣の中に、目は開いているのかどうか。親は餌を求めて出かけたままである。突然、子燕たちは親の気配を察し、顔一杯を口にして伸びあがる。「落ちんばかりに」が生命力にあふれている。

271 ひと息に運ぶ渇筆涼しかり　市川　奥澤よし江

評　渇筆はかすれた感じを出す技法。机上の清書であろうか、大筆を抱えて床上に書く作品であろうか。かすれを出すためには一気に筆を運ぶ気合が必要である。その後の爽快さはまた格別である。

473 土用しじみ出雲の砂を少し吐き　射水　成瀬真紀子

評　暑さで食欲の落ちる頃によろこばれる土用しじみ。句の「出雲の砂を吐き」が眼目である。大和しじみの主要産地の一つ宍道湖からはるばる来たしじみが、料される前にそっと砂を吐く、俳句ならではのおもしろさである。

中村千久　選

3 理科室にエーテル匂ふ梅雨入かな　小松島　岡田あゆみ
27 反り返り歩く妊婦や百日紅　東京　久留島規子
35 かるの子のほどけ五つの水尾となり　流山　穂苅照子
184 断捨離の写真の祖母のアッパッパ　千葉　喜多恭仁子
317 佞武多行く津軽の闇を高くして　柏　古川京子
329 城垣の地震に崩れしまま灼くる　金沢　中條睦子
348 杣村の徽の香放つ神楽殿　静岡　本多ひとみ
408 みかん色の月上げ烏瓜の花　横浜　榎本文代
417 海霧の町沖より汽笛ふくらみ来　札幌　落合裕子
451 花がつおふはふは引きて蟻の列　静岡　石川裕子
457 病む母の傍らいつもソーダ水　徳島　山本瑤子
544 闇無音月下美人のひらきそむ　千葉　田中道江
569 案山子かと見ればすたすた歩き出す　四街道　塗木翠雲
687 ダリの絵のやうに炎暑をぐつたりす　佐倉　内海良太

特
182 陣痛の馬の蹴散らす今年蕊　七尾　谷渡末枝

評　掲句に触れた瞬間に、伊代治師の〈よろこびて馬のころがる今年蕨〉の句を思った。掲句は陣痛の苦しさにのた打つ牝馬である。新しい命が届けられようとする馬小屋の様子が「蹴散らす今年蕊」から伝わってきた。

福島せいぎ　選

13 吊橋を渡りこれより夏の山　伊勢原　佐藤和子
49 玉砕の島に燃え立つ凌霄花　徳島　村上和義
79 指先でなぞる点字の本涼し　東京　一由久美子
217 炎昼の波止場の割れ目なゐの跡　静岡　松永博子
276 鯉跳ぬる水輪に揺るる未草　静岡　永田公香
329 城垣の地震に崩れしまま灼くる　金沢　中條睦子
331 夏炉焚きまりもは湖に沈みたる　金沢　南　恵子
361 ゴンドラを降りて花野を頂へ　所沢　南雲秀子
404 磐座のなめくじの跡光りたる　船橋　中嶋久登
512 渓流の音上り来る葛の花　金沢　田上ナツ子
562 指笛や花野の牛の立ち上がる　金沢　豊田高子
686 蛇口より洩るる水音原爆忌　佐倉　内海良太
691 どろどろと下座の太鼓や夏芝居　志木　中村千久
697 夕立くる気配に風の匂ひけり　那覇　稲嶺有晃

特
517 高原のこんにやく畑雲の峰　加須　茂木弘子

評　高原で見つけたこんにゃく畑。こんにゃくは山間部の農家などで作られる。夏の間は青々としているが、目立たない。「これこんにゃくでないの」の会話が聞こえてきそう。高原に夏の風が吹き、はるかに夏の雲。句は写生にもとづく正統派。

柳澤宗正　選

5 高高と緑児掲ぐ雲の峰　敦賀　中川雅月
49 玉砕の島に燃え立つ凌霄花　徳島　村上和義
77 斎田の閨を奏づる落し水　足利　大木　茂
133 手握るも返せぬ母や晩夏光　佐倉　鈴木美根子
183 漆掻百日小屋に自炊して　七尾　谷渡末枝
210 青田風ひびき軽やか手織機　金沢　河野尚子
233 背で受く瞥策五臓へ今朝の秋　益子　光岡れい子
253 母の膝取り合ふ幼夕端居　金沢　北川禮子
271 ひと息に運ぶ渇筆涼しかり　市川　奥澤よし江
310 森凍てて撫百幹の軋みかな　札幌　林　陽子
330 白山の風の触れゆく青田波　金沢　中條睦子
395 原子炉の隠るる岬雲の峰　徳島　福島せいぎ
570 八月や青き地球の沸騰す　四街道　塗木翠雲
667 薪割りの響く農場大夕焼　東京　岡村純子

特
169 **地震あとの寒夜に上ぐる呱々の声**　内灘　塩井志津

評　能登地震を思う。余震の続く不安な真冬の夜中。産声ではなく呱々の声とあるので乳呑児の泣き声。その乳呑児にも親や周りの途方に暮れている様子や恐怖が乗り移っているようだ。しかし、厳しい環境の中でも赤ん坊はみんなの希望の光でもあり頑張れる。しみじみとした句。

曽根　満　選

35 かるの子のほどけ五つの水尾となり　流山　穂苅照子
67 垂れ草に弾みを残し蜻蛉翔つ　さいたま　山本右近
73 潮鳴りを鬼哭と聞くも敗戦忌　西原　宮城　勉
95 長光の映ゆる鉦子の涼しさよ　静岡　田中秀幸
180 炎帝に背く石工の力瘤　七尾　谷渡末枝
199 山蟻の曳く飽食の欠けらかな　東京　下嶽孝一
238 足早に来て足早に墓参　静岡　藤原千代子
307 紺青の湖に春蟬声溶くる　札幌　林　陽子
458 我住処欅三本蟬数多　徳島　山本瑤子
492 御仏の裳裾の流れ春兆す　武蔵野　砂地宏子
504 義元を修す木遣の声涼し　静岡　小川明美
530 鷹乃ち学習す登呂田に画す富士の山　静岡　飯田優子
562 指笛や花野の牛の立ち上がる　金沢　豊田高子
569 案山子かと見ればすたすた歩き出す　四街道　塗木翠雲

特
369 **涼しさや頬に添へたる思惟の指**　川崎　大久保　進

評　特選句は、弥勒菩薩の写生と思えるが、「頬に指を添える」ことは日常の景で、仏に限らない。作者は相手のこの仕種に「涼しさ」を感じ一句を得た。暑さの中の一瞬の涼しさを詠んだ感性の鋭さに感動。特に、「添えた指」を「思惟の指」と捉えたのは作者の発見。

林　陽子　選

94 臥す人へ仕立上りの更衣　佐倉　米田敏子
108 観覧車夕焼け空を一巡り　札幌　松原智津子
171 若竹やどの子にもある伸び盛り　内灘　塩井志津
253 母の膝取り合ふ幼夕端居　金沢　北川禮子
279 数珠繰りて少年祈る広島忌　徳島　福島吉美
296 僧庵の掛香匂ふ薄き闇　大和　中谷由郁
329 城垣の地震に崩れしまま灼くる　金沢　中條睦子
355 蹴口潜る項に秋の風　佐倉　横川良子
371 泳ぎ終へ纏ひし水の重さかな　川崎　大久保進
416 七夕や亡き夫の待つ予約席　札幌　落合裕子
457 病む母の傍らいつもソーダ水　徳島　山本瑤子
474 梅雨の蝶去りて重たき風残る　射水　成瀬真紀子
491 人混みを空色の風春ショール　武蔵野　砂地宏子
690 手花火の後ろの闇の深かりき　志木　中村千久

特
77 斎田の閤を奏づる落し水　足利　大木　茂

評　神に供える米を栽培する斎田。稲穂が実ると畦の水を落とし、田を乾かし刈り入れに備える。夜の静寂に田水を落とす音が、まるで雅楽のように神神しく聞こえてきたのであろう。閤に佇み、聞き入る作者が見えるようである。旅の夜の景なのだろうか。想像のふくらむ句である。

亀田やす子　選

36 河童忌や小石挟まる靴の底　流山　穂苅照子
111 聖橋わたる男の日傘かな　東京　島野ひさ
125 逃げ回る裸足はだかの健診児　佐野　義本美智江
170 土間涼し手斧けづりの梁の艶　内灘　塩井志津
182 陣痛の馬の蹴散らす今年藁　七尾　谷渡末枝
237 雲海や富士五合目の握り飯　茅ヶ崎　久保田早子
254 汗滲む若き腕や木地を挽く　金沢　北川禮子
265 養生の馬に合羽や合歓の花　佐野　売野　緑
327 風入れや一向一揆の僧兵図　金沢　中條睦子
366 夏休み搭乗の子に手を振れり　佐野　店網洋子
371 泳ぎ終へ纏ひし水の重さかな　川崎　大久保進
375 河骨の音符のやうに川面出づ　佐野　芝宮留美子
407 校庭の白線揺らぐ炎暑かな　横浜　榎本文代
570 八月や青き地球の沸騰す　四街道　塗木翠雲

特
271 ひと息に運ぶ渇筆涼しかり　市川　奥澤よし江

評　この夏、毎日の危険な暑さに閉口した。書道のイベントであろうか、普段持つことのない大きな筆で一気に文字を書く女子高生を想像した。「ひと息に運ぶ渇筆」の表出にリズムがあり流麗な文字のかすれ加減のモノクロが涼しさを感じさせる。

沢辺たけし 選

42 霊峰を瞳に入れて仔馬立つ 宇都宮 阿久津勝利
43 年重ねシンプルが好き冷奴 佐野 亀田やす子
144 夏燕影に力のありにけり 静岡 荻野加蓉子
166 長き夜やエンドロールに傷の雨 東京 桑原優美子
180 炎帝に背く石工の力瘤 七尾 谷渡末枝
199 山蟻の曳く飽食の欠けらかな 東京 下嶽孝一
294 八重波と花いちもんめ浜千鳥 金沢 松田好子
350 水遊び唇の色変はるまで 静岡 本多ひとみ
370 路地抜けて風にふくらむ祭笛 川崎 大久保進
394 かぼちやの葉叩きつ来たり大夕立 四街道 奥太雅
495 悴む手包みし母の大きな手 那珂川 髙山ひさ子
525 梨売りや戸板一枚店として 津幡 河原昭子
569 案山子かと見ればすたすた歩き出す 四街道 塗木翠雲
702 筑波嶺の芯まで晴れて豊の秋 佐倉 内海保子

特
472 **ふくらはぎの肉盛り上がり山車動く** 射水 **成瀬真紀子**

評 「ふくらはぎ」のクローズアップからはじまり、「肉盛り上がり」と、肢を踏ん張った時の筋肉の動きを描写、そして下五で場面が切り替わり、動き始めた山車が鮮明に浮かびあがる。「ふくらはぎ」の写生がしっかり出来ているからこそ「山車動く」が生きた。

下嶽孝一 選

17 仙人掌の刺のやさしき花盛り 松山 入河大
27 反り返り歩く妊婦や百日紅 東京 久留島規子
42 霊峰を瞳に入れて仔馬立つ 宇都宮 阿久津勝利
72 秘めゐしを語る卒寿よ沖縄忌 西原 宮城勉
83 骨切りの鰭の湯どほし花咲かす 敦賀 倉谷ます美
107 朝まだき海霧濃き沖へ消ゆる舟 札幌 松原智津子
136 水馬六方を踏む空の上 佐倉 鈴木隆久
308 日焼濃し女庭師のふくらはぎ 札幌 林陽子
314 八月の月へ女網の美ら飾り 宜野湾 宜野顕
341 荒祭女きりりと髪結へり 焼津 小梁洋子
374 老い見せぬ師の手さばきや風炉手前 東京 高野翠子
414 一人居の雨の音汲む新茶かな 柏 鹿毛満子
417 海霧の町沖より汽笛ふくらみ来 札幌 落合裕子
421 芭蕉布の小袖や首里の案内人 那覇 中本清

特
21 **繭を煮る七本槍の岳の水** 敦賀 **雷田勝子**

評 秀吉軍と勝家軍の賤ヶ岳の戦いで功績を上げた秀吉側の加藤清正以下七人の若武者を七本槍という。「繭を煮る」は夏の季語で生糸を取ることである。作者は賤ヶ岳山麓の清浄な水で繭を煮て上質な生糸がとれる事を喜んでおられる。

榎本文代　選

30 にぎりめし土用鰻を刻み込み　東京　久留島規子
117 遠花火浮き上がりたる大伽藍　鎌倉　恒川清爾
211 声太き瓦職人雲の嶺　金沢　河野尚子
237 雲海や富士五合目の握り飯　茅ケ崎　久保田章子
265 養生の馬に合羽や合歓の花　佐野　売野緑
271 ひと息に運ぶ渇筆涼しかり　市川　奥澤よし江
317 佞武多行く津軽の闇を高くして　柏　古川京子
327 風入れや一向一揆の僧兵図　金沢　中條睦子
390 銀色の男日傘や交差点　志木　汐見克彦
429 畳みたる反古に墨の香夜の秋　仙台　富田洋子
450 蜜豆の寒天雨の窓烟る　横浜　星野信子
510 薄藍や肩やはらかに能登上布　東京　江見悦子
538 帰り来てひとり泳げる夜の川　日野　喜多尾明子
598 鶏頭花何か怒つてゐるような　静岡　加山ひさ子

特
711 夏の果空き家を草が呑み込みぬ　横浜　大駒泰子

評　外来種も多く、この頃の雑草はたけだけしい。夏草がはびこると空き家が埋もれてしまうほど、それを「呑み込みぬ」と擬人化した表現が巧み。厳しかった夏が過ぎようとしている。家を覆っている草が夕風にそよぎはじめた。

神田美穂子　選

66 石段に貼り付く影や原爆忌　流山　沢辺たけし
131 遠雷やあの日のことは小さき嘘　佐倉　鈴木美根子
144 夏燕影に力のありにけり　静岡　荻野加碧子
166 長き夜やエンドロールに傷の雨　東京　桑原優美子
204 水音の桶にラムネの五、六本　金沢　石川純子
229 風ひとつ零し風鈴止みにけり　静岡　杉澤修
248 燕の子落ちんばかりに親迎ふ　静岡　伊東文恵
253 母の膝取り合ふ幼夕端居　金沢　北川禮子
375 河骨の音符のやうに川面出づ　佐野　芝宮留美子
417 海霧の町沖より汽笛ふくらみ来　札幌　落合裕子
429 畳みたる反古に墨の香夜の秋　仙台　富田洋子
474 梅雨の蝶去りて重たき風残る　射水　成瀬真紀子
558 通夜参り汗にはりつく真珠かな　福岡　宮田千恵子
686 蛇口より洩るる水音原爆忌　佐倉　内海良太

特
369 涼しさや頬に添へたる思惟の指　川崎　大久保進

評　一読三十年程前に拝観させていただいた奈良斑鳩の中宮寺の半跏思惟像が思い出された。地名や固有名詞を使った句はとかく観光俳句や説明句になりやすい。掲句は、あの頬に添えられた繊細な指を詠むことにより涼しさの季語が生かされた。

中條睦子 選

89 蓮開く透明な息ぽつと吐き 富士 神田美穂子
166 長き夜やエンドロールに傷の雨 東京 桑原優美子
182 陣痛の馬の蹴散らす今年藁 七尾 谷渡末枝
197 武士家来同じ香りの菊衣装 東京 下嶽孝一
286 むらさきは母恋ふ色や式部の美 金沢 松井佐枝子
418 次つぎと明けの隊列雁帰る 札幌 落合裕子
451 花がつおふはふは引きて蟻の列 静岡 石川裕子
455 阿寒湖は鏡となりし夏の雲 徳島 山本瑤子
472 ふくらはぎの肉盛り上がり山車動く 射水 成瀬真紀子
491 人混みを空色の風春ショール 武蔵野 砂地宏子
562 指笛や花野の牛の立ち上がる 金沢 豊田高子
628 低山の囲む港のペーロン走 長崎 丸本祥夫
672 ガジマルの瘤にからまる蛇の衣 那覇 大湾宗弘
703 立秋の沼の匂ひの新たなる 佐倉 内海保子

特
308 **日焼濃し女庭師のふくらはぎ** 札幌 林 陽子

評　高い梯子に乗って庭木の剪定や、植栽の手入れや管理と体を使う仕事なので、まだまだ男性の多い職業。そんな中、女庭師が活躍していることに感動、日焼けの濃いふくらはぎを捉えたところに逞しさが感じられる。

前田貴美子 選

4 炎天や揺られて昏き救急車 小松島 岡田あゆみ
111 聖橋わたる男の日傘かな 東京 島野ひさ
166 長き夜やエンドロールに傷の雨 東京 桑原優美子
285 夕照をかなかなしぐれ鏡花の碑 金沢 松井佐枝子
311 トランペット吹く向日葵の翳りかな 宜野湾 宜野 顕
420 沢藤に少し開けおく夜の玻璃戸 那覇 中本 清
473 土用しじみ出雲の砂を少し吐き 射水 成瀬真紀子
474 梅雨の蝶去りて重たき風残る 射水 成瀬真紀子
510 薄藍や肩やはらかに能登上布 東京 江見悦子
537 身をむすび死して美し秋の蛇 日野 喜多尾明子
591 火を点けて供へし煙草蟬しぐれ 札幌 谷 廣司
600 ドアノブに残る指紋やそぞろ寒 静岡 加山ひさ子
681 オランダ墓に造花褪せたる残暑かな 那覇 大城末治
699 歳月や麻服にあたらしき皺 那覇 稲嶺有晃

特
660 **真昼間の黙の中より黒揚羽** 柏 内田郁代

評　「真昼間の黙」は白昼の闇。黙の闇の一片でもあるかのように黒揚羽が作者の身を離れ白昼を舞う。モノクロームの映像が作者の祈りを描く。

令和六年度
「万象」全国俳句大会
作品集

1 校長の天狗現るキャンプかな　小松島　岡田あゆみ
2 一年生へ小さき七夕竹届く
3 理科室にエーテル匂ふ梅雨入かな
4 炎天や揺られて昏き救急車
5 高高と緑児掲ぐ雲の峰　敦賀　中川雅月
6 捩花の差し出す稚児の莫蓙筵
7 夏座敷僧七条の十二人
8 湖北路の親鸞像や迎へ鐘
9 形代の袖に紅差し母の名も　東京　藤田裕子
10 墓じまひ終へし今宵の冷し酒
11 ロボットの運んできたる氷菓かな　伊勢原　佐藤和子
12 開かんと香りのもるる蓮の花
13 吊橋を渡りこれより夏の山
14 新涼の水したたらす鷺の脚
15 黒檀の柱なでたり風涼し　松山　入河　大
16 雑音のビル街満たす蟬時雨
17 仙人掌の刺のやさしき花盛り
18 かなぶんのぶつかる羽音速まりぬ
19 白昼夢目覚めよきかな籐寝椅子　敦賀　鷲田勝子
20 看板は百毒下し梅雨に入る

21 繭を煮る七本槍の岳の水

22 車体下の整備士ぬつと日焼顔

23 梔子の香や腐葉土の積まれゐて　町田　桔梗　純

24 猛暑来て久しき出会ひ兄弟

25 閻に浮く手花火の子ら声あげて

26 夏休みの乙女らはしやぐ一夜かな

27 反り返り歩く妊婦や百日紅　東京　久留島規子

28 老鶯や祭神富士山をまなかひに

29 初蟬や明けて間もなき窓辺まで

30 にぎりめし土用鰻を刻み込み

31 十年の深み味はふ梅酒かな　佐倉　杉田富美代

32 朝からの声高らかに蟬時雨

33 夏場所や取り組み終へて団扇波

34 茗荷の子きりなく摘んで笊一杯

35 かるの子のほどけ五つの水尾となり　流山　穂苅照子

36 河童忌や小石挟まる靴の底

37 出来たての茅の輪に風の集まりぬ

38 朝焼に開かれてゆく波の音

39 夏山路江戸の名残りの道標　宇都宮　阿久津勝利

40 形見なる紙魚に喰はれし紋所

41 蟻群れて寸の骸を引くに引く

42 霊峰を瞳に入れて仔馬立つ

43 年重ねシンプルが好き冷奴　佐野　亀田やす子

44 天蚕の小枝にからむ糸強し

45 沖縄の青海原の団扇かな

46 笹団子の紐の長きや梅雨の晴

47 足裏の貝殻抉る土用波　徳島　村上和義

48 白壁に黒き人影広島忌

49 玉砕の島に燃え立つ凌霄花

50 学舎の蔦の窓辺の風青し

51 山道の小さき祠や竹落葉　徳島　宮西修一

52 潮引いて蟹の巣穴の大と小

53 蟬時雨樟の大樹を揺らしけり

54 夕立来て見知らぬ人と軒の下

55 美智子妃の深き黙祷沖縄忌　敦賀　川口和代

56 思ひ出は父との木曽路沙羅の花

57 苔むした千代女の句碑の秋気かな

58 湖北の酒酒豪うるほす芒種かな

59 七夕や文字にできない願ひあり　大江　安藤桂花

60 円窓に泰山木の花まぶし

61 雑草と呼ばれたくないねじり花
62 蜩やシャッター音に飛びたてり
63 蒼林に砂子のをどる泉かな　流山　沢辺たけし
64 白詰草循環バスは日に二本
65 滝音に身を浸したる静寂かな
66 石段に貼り付く影や原爆忌
67 垂れ草に弾みを残し蜻蛉翔つ　さいたま　山本右近
68 原爆忌薔薇ばらバラと崩れ散る
69 淵暮れて瀬の暮れ残るちんちろりん
70 消灯のあとの小さな燈火親し
71 汗もことば涙もことば試合果つ　西原　宮城　勉
72 秘めゐしを語る卒寿よ沖縄忌
73 潮鳴りを鬼哭と聞くも敗戦忌
74 億年の刹那一閃流れ星
75 盤の跡白き洞門風涼し　足利　大木　茂
76 秋天を跳んで砂場に丸き跡
77 斎田の闇を奏づる落し水
78 勧進帳睨む門守涼新た
79 指先でなぞる点字の本涼し　東京　一由久美子
80 白百合のはづるる音を聞き留む
81 前線の雲押し寄する開山祭
82 花深く虫の休める大暑かな
83 骨切りの鰭の湯どほし花咲かす　敦賀　倉谷ます美
84 宿場跡「七本槍」の酒涼し
85 風死して気だるく聞こゆ時の鐘
86 漁へ出る見習ひ息子潮焼けす
87 鳥はみな朝を歌へり飛花落花　宮士　神田美穂子
88 朝風や植田の澄みに逆さ富士
89 蓮開く透明な息ぽつと吐き
90 血の色の薔薇のありけり爆心地
91 花火師は早や来年の夢語る　佐倉　米田敏子
92 白絣似合ふ夫居て着づじまい
93 風もなく庭に栗落つ午後の閑
94 臥す人へ仕立上りの更衣
95 長光の映ゆる銚子の涼しさよ　静岡　田中秀幸
96 片蔭を選り杖刻む媼かな
97 異国語の飛び交ふ汗の雷門
98 菖蒲園聞く四阿の国訛
99 薬師寺の僧の御ことば初暦　柏　村田由美子
100 無患樹の数多実の降る老舗宿

101 澄みわたる雨後の満月夏至なれば
102 梔子の白無垢のごと物陰に
103 思春期は不安いつぱい鳳仙花　徳島　平岡　功
104 砂灼くるだれにでもある反抗期
105 お出掛けに少し派手目や鳳仙花
106 片陰やレディーファースト実践す
107 朝まだき海霧濃き沖へ消ゆる舟　札幌　松原智津子
108 観覧車夕焼け空を一巡り
109 疾風雲たちまち翳る花野かな
110 名月待つ老の臥所の明かり窓
111 聖橋わたる男の日傘かな　東京　島野ひさ
112 大大事にと云つて言われて著栽の花
113 父の日の墓に供ふる越後酒
114 木道を走る少年蓮の花
115 夏料理京の濱物少し添へ　鎌倉　恒川清爾
116 露座仏や山滴りて暮れにけり
117 遠花火浮き上がりたる大伽藍
118 箱庭や日照雨静かに土叩き
119 黄金虫椎大木で乾き果つ　横浜　加藤和子
120 落日や背にまつ赤な梅雨満月
121 洋桃へ裏庭の桃交配す
122 交配の洋桃歪で紅熟す
123 風涼し沼に根を張る落羽松　佐野　義本美智江
124 小さき葉に蟷螂の子の鎌構へ
125 逃げ回る裸足はだかの健診児
126 暑中見舞ひテネシーワルツの動画かな
127 蟹漁の花咲く海霧の根室湾　札幌　和島良一
128 花蓼の郷（くに）に相似る野道かな
129 梅花藻の花清かなる夏の川
130 畑うねりゆくじやがたらの花烟り
131 遠雷やあの日のことは小さき嘘　佐倉　鈴木美根子
132 字の歪み母の七夕かざりかな
133 手握るも返せぬ母や晩夏光
134 夏逝くや杖は今でも傘立に
135 解夏の朝飛竜頭の味やや薄め　佐倉　鈴木隆久
136 水馬六方を踏む空の上
137 海月浮き吾の淋しさに寄り添へり
138 山彦の帰り来たりて秋の澄む
139 裏山にひときは揺るる今年竹　静岡　長谷川洋子
140 急流の水面に散れり合歓の花

141 をんなつと定家葛の花拾ふ
142 梅雨晴や吹奏楽の調べ合ふ
143 先生の元気な頃や秋夕焼 静岡 荻野加蒋子
144 夏燕影に力のありにけり
145 夕空の余白埋むる法師蟬
146 秋暑し小銭に太る小銭入れ
147 高台の玻璃しろがねや夏の朝 金沢 宮崎惠美
148 夏シャツの笑みふりかへる曲り角
149 萩ゆらし記念撮影句会あと 金沢 道場啓子
150 夏暁うすうす鷺の片足立
151 二才児のいやいやグッピーみぎひだり
152 宗達の墓花石榴くぐり来て
153 万緑や金の鯱鉾日を返す 敦賀 為永香月枝
154 銀河濃しメーテル像に星の降る
155 歳時記は吾のバイブルホ句の秋
156 虫時雨ブラボー叫ぶ演奏会
157 屋根修理束の間晴れて梅雨終盤 横浜 豊美佐子
158 高層階のゆさと音して梅雨の地震
159 歯科医院モーツアルト流る梅雨の午後
160 厚き雲ほどけて光る梅雨満月
161 復興の太鼓奉納浦祭 白山 朝倉みゆき
162 鰻の日うなぎ届きて片えくぼ
163 獣来て体操中止夏の朝
164 熱帯夜水を摂れよと児のメール
165 参道に手相見の出る秋日かな 東京 桑原優美子
166 長き夜やエンドロールに傷の雨
167 提灯を吊るす電線秋まつり
168 灯火親し珈琲の香と文庫本
169 地震あとの寒夜に上ぐる呱々の声 内灘 塩井志津
170 土間涼し手斧けづりの梁の艶
171 若竹やどの子にもある伸び盛り
172 ひぐらしや灯火の絶えし古御堂 横浜 柳澤宗正
173 足けんけん子らの頭上を赤とんぼ
174 車窓よりビルの狭間の十三夜
175 色変へぬ松や「万象」末永く
176 浜茄子の低きに群るる砂嘴の果て 札幌 中鉢弘一
177 ほうたるの晴れの舞台や深き闇
178 夏の日を取り込む大地草ロール
179 合歓の花母の形見の櫛に似て
180 炎帝に背く石工の力瘤 七尾 谷渡末枝

181 穂孕みの田をふんだんに山の水

182 陣痛の馬の蹴散らす今年藁

183 漆掻百日小屋に自炊して

184 断捨離の写真の祖母のアッパッパ　千葉　喜多恭仁子

185 七夕へ願ひは一つ癌完解

186 ふるさとに戻らぬ決意能登も夏

187 パリの夏金を決めたる巴投げ

188 おしやべりな鳥が来てゐる涼しき木　那覇　前田貴美子

189 蟬の木の下百円の水干せり

190 太陽に倦み向日葵は影落す

191 偲ぶ日の言葉涼しく拾ひけり

192 扇風機人なき部屋に首を振り　静岡　藤本節子

193 通勤の波に逆らひ汗の顔

194 月下美人のかをり広ぐる夜の帳

195 向日葵の迷路となりし牛舎跡

196 炎立つ一揆の里の曼殊沙華　東京　下嶽孝一

197 武士家来同じ香りの菊衣装

198 起重機の宙にとどまる盆休み

199 山蟻の曳く飽食の欠けらかな

200 笹の葉の青き香りや星まつり　伊勢原　山本カツ子

201 放牧の草の匂ふや半夏生

202 朝焼の富士に明るき白き線

203 色斑を並べ梅干香を放つ

204 水音の桶にラムネの五、六本　金沢　石川純子

205 綿菓子に顔の隠るる浴衣の子

206 蛇の殻光閉じ込め白蛇めく

207 困り事匙で崩してかき氷

208 声立てて赤子蹴り上ぐ初湯かな　金沢　河野尚子

209 ただいまと春泥の靴跳びはねり

210 青田風ひびき軽やか手織機

211 声太き瓦職人雲の峰

212 花合歓の木蔭を借りて人を待つ　金沢　伊藤美音子

213 再会てふ香水今もときめきて

214 朝月夜芙蓉にきざす花の色

215 絡み合ふ走り根の闇ちちろ鳴く

216 白南風や苫屋を燃す煙立つ　静岡　松永博子

217 炎昼の波止場の割れ目なゐの跡

218 植込みに紅散らしたる百日紅

219 産土の舞殿包むえごの花

220 ゴジラ視る老ひの観客アロハシャツ　静岡　望月敏男

221 香水売る電子画面の女笑む

222 終戦忌記憶の底のカーキ色

223 素つぴんの顔を晒せし秋の風

224 黒部ダム怒濤の放水雪解川　千葉　松浦陵保

225 美声聴くライブの後の大夕立

226 北岳の高嶺の花や夏の富士

227 雪しまき幾何学模様硝子窓

228 滾つ瀬の風に研がるる蘆の角　静岡　杉澤　修

229 風ひとつ零し風鈴止みにけり

230 羽に風とどめて果つる秋の蝶

231 はたた神陶器の馬の嘶けり　益子　光岡れい子

232 牛蛙居るを告ぐるや午前二時

233 背で受く鍼策五臓へ今朝の秋

234 琵琶奏者の声の高きや法師蟬

235 梅干して夜空に託す三日かな　茅ヶ崎　久保田章士子

236 灸花鼻につけたる昭和の子

237 雲海や富士五合目の握り飯

238 足早に来て足早に墓参　静岡　藤原千代子

239 墓洗ふ代はる代はるにポンプ漕ぎ

240 今日もまた同じ道行く蟻の列

241 交差点雀啄ばむ穂草かな

242 朝の蓮不忍の池動き出す　東京　小池清晴

243 震災忌木歩の果てし枕橋

244 生徒一丸校庭中に水を打つ　船橋　久保村淑子

245 買ひ替へて出掛けたがつてる夏帽子

246 手描きばか面つけ踊る子等夏祭

247 夏の森せめぎ合ふてる樹間かな

248 燕の子落ちんばかりに親迎ふ　静岡　伊東文恵

249 本日の桃売り切れり蜑の店

250 涼風の細波撫づる丹の鳥居

251 梅干すや真昼の日差し欲しいまま

252 基地闘争ありし砂丘や合歓の花　金沢　北川禮子

253 母の膝取り合ふ幼夕端居

254 汗滲む若き腕や木地を挽く

255 たあいなき話はづめり百日紅　金沢　高田たみ子

256 見上げたる木木うつそうと夏深し

257 月見草烏の屍ねむるごと

258 朝まだき茶屋街しんと夏柳

259 紙飛行機ふと窓抜けし薄暑光　日野　松原悦子

260 親不知子不知冬の怒濤かな

261 露坐仏の空ひろびろと風光る
262 両国や力士の胸の赤い羽根
263 総代の笛にぐらりと山車発てり 佐野 売野 緑
264 坂を押す山車に助つ人来たりけり
265 養生の馬に合羽や合歓の花
266 雷様が来るよと爺の声優し
267 半畝は蔓先かへて蔭を挿す 新潟 髙野松風
268 つまだちて唐黍の花剪り落とし
269 蟬いまだ声の聞こえぬけさの秋
270 唖蟬の耳かすめ地へうらがへる
271 ひと息に遅ぶ渇筆涼しかり 市川 奥澤よし江
272 どこまでも真つ直ぐな道夏の雲
273 ひまわりを抜けて一輌犬吠へ
274 大き影地球に映し蟻が行く
275 城濠の水面をすべる夏燕 静岡 永田公香
276 鯉跳ぬる水輪に揺るる未草
277 青栗のひとつころがる道の端
278 水面を早苗蜻蛉のたたきをり
279 数珠繰りて少年祈る広島忌 徳島 福島吉美
280 唐辛子魔除けに吊りし長屋門
281 墓洗ふ墓地の四方に杓の音
282 鮨種に握る酢漬けの紅茗荷
283 蛇の衣江戸に見しより胸騒ぎ 金沢 松井佐枝子
284 空蟬の爪わが指を離さざり
285 夕照をかなかなしぐれ鏡花の碑
286 むらさきは母恋ふ色や式部の実
287 弦月の月光浴びる顔手足 金沢 廣田宏美
288 那智石の黒光りする梅雨最中
289 参道の玉砂利を踏み墓参り
290 木下闇じやれる二匹の白鼻心
291 能登瓦傾き留む晩夏かな 金沢 松田好子
292 窓のなき窓岩灼くる浜の夕
293 大人びた口を利く妹凰仙花
294 八重波と花いちもんめ浜千鳥
295 温泉街おかみ勇まし菖蒲太刀 大和 中谷由郁
296 僧庵の掛香匂ふ薄き闇
297 百日紅みすゞの小さき文字は澄く
298 炎ゆる日の萩反射炉を見上ぐ子よ
299 日雷青空残し失せにけり 静岡 曽根 満
300 炎帝へひれ伏してをり大八洲

301 方程式解けぬ教室風の死す

302 刈草の獣色なる乾びかな

303 幼子につまみて教ふ稲の花 町田 吉中愛子

304 骨ばつて灼くる河原の石白し

305 鬼灯の連なり一つ色づかず

306 新札の渋沢使ふ鰻の日

307 紺青の湖に春蟬声溶くる 札幌 林 陽子

308 日焼濃し女庭師のふくらはぎ

309 蟬涼し餓鬼大将の秘密基地

310 森凍てて撫百幹の軋みかな

311 トランペット吹く向日葵の翳りかな 宜野湾 宜野 顕

312 よき風や父の植えたる島バナナ

313 熊蟬や列席の顔みな古りぬ

314 八月の月へ女網の美ら飾り

315 夕かなかな吾が来し方を繙きぬ 柏 古川京子

316 夜更けまで灯のをどる祭りかな

317 佞武多行く津軽の闇を高くして

318 行く秋の北の大地や寮歌聴く

319 夏波のリズム江差の追分節 札幌 岡本敬子

320 耕して忠実に地に生き農夫老ゆ

321 にしん番屋山をそびらに海霧のなか

322 雪融けや人に年輪ありにけり

323 息子から我が家に届く御中元 徳島 山本晴美

324 パリの夏メダルダッシュのオリンピック

325 天を衝くやうにすくつと酢橘の木

326 夏の朝終の住み処へ鳩の声

327 風入れや一向一揆の僧兵図 金沢 中條睦子

328 尾の先の少しはねたる蛇の殻

329 城垣の地震に崩れしまま灼くる

330 白山の風の触れゆく青田波

331 夏炉焚きまりもは湖に沈みたる 金沢 南 恵子

332 照らされてきららかガレの香水瓶

333 おしろいの吹かれてゐたり人恋し

334 いづくより篠笛洩るる良夜かな

335 夾竹桃異人真つ赤なワンピース 大阪 入山繁幸

336 新涼や刃触り指に砥ぎ包丁

337 石舞台悠然と舞ふ鬼やんま

338 初萩や無村生誕故地の句碑

339 秋天を飛行機雲が真つ二つ 焼津 小梁洋子

340 街道の色濃くなりぬ酔芙蓉

341 荒祭女きりりと髪結へり
342 秋晴の眩しき日なり退院す
343 煮びたしの茄子つややかな夕の膳 福岡 園田清子
344 おはなしを聞く子等の目や星光る
345 短夜やベッド周りの文庫本
346 旗を見て国のあてつこ夏五輪
347 涼しさや縄文土器の音軽し 静岡 本多ひとみ
348 杣村の徽の香放つ神楽殿
349 光跡に光跡降れり揚花火
350 水遊び唇の色変はるまで
351 泉より光琳模様湧き上がる 静岡 大長文昭
352 観阿弥の終の舞の碑木の実落つ
353 焼跡に生焼けの蕗終戦日
354 水垢離の尻に張り付く白褌
355 蹴口潜る項に秋の風 佐倉 横川良子
356 僧院の朝の静寂や涼新た
357 えのころや地名に残す宿場町
358 秋の雨路地に畳屋在りし町
359 せせらぎやあとひく美味し鮎フライ 佐野 仲山さよ子
360 青葉闇繰り返し跳ぬ鮒きらら

361 ゴンドラを降りて花野を頂へ 所沢 南雲秀子
362 高原のテラスに昼寝牧の鐘
363 渓谷の水滔々と蟬しぐれ
364 嬬恋の大キャベツ下げ帰り来る
365 夕さりの水滴ひかる青田かな 佐野 店網洋子
366 夏休み搭乗の子に手を振れり
367 明日開くと思ふあさがほ子と数ふ
368 石段の真中に猫や夏盛ん
369 涼しさや頬に添へたる思惟の指 川崎 大久保 進
370 路地抜けて風にふくらむ祭笛
371 泳ぎ終へ纏ひし水の重さかな
372 スナップの手首しなやか水を打つ
373 蟬の声朝餉の前の茶一ぷく 東京 高野翠子
374 老い見せぬ師の手さばきや風炉手前
375 河骨の音符のやうに川面出づ 佐野 芝宮留美子
376 ひとところ蓮の葉返す山の風
377 拾ひたる天蚕すでに抜け殻と
378 いちはやく風に遊ぶや江戸風鈴
379 ピースピースと掲げてデモや夏帽子 佐倉 大内佐奈枝
380 炒米を噛みし記憶や終戦忌

381 ピアノの音同じところを秋暑し

382 秋渚靴底うすく砂鳴りぬ

383 釣堀や空より魚を受けとめる　佐野　加藤季代

384 子ら去りしあとの砂山晩夏光

385 猫じやらし風を捕へつ捕はれつ

386 真清水やしづかに沈む夏落葉

387 冬空や送電塔の孤高なる　志木　汐見克彦

388 噛みしめし新たまねぎの甘きかな

389 父の日の剃り残したる髭白き

390 銀色の男日傘や交差点

391 うやむやな政治改革半夏生草　四街道　奥　太雅

392 空を飛ぶ人も観てをり揚花火

393 ぶんと来て庭一巡り金亀子

394 かぼちやの葉叩きつ来たり大夕立

395 原子炉の隠るる岬雲の峰　徳島　福島せいぎ

396 禅堂を開け放したり蟬しぐれ

397 麦の秋馴染の酒屋閉店す

398 巣を守る鳶が峡の空を舞ふ

399 鮎釣りの那須岳見上ぐ小休止　佐野　菟原美穂子

400 助つ人と共に引き出す過疎の山車

401 水かぶり鉢の守宮の道化めく

402 銅の屋根越えて燃えたつ百日紅

403 神主の浅沓に替へ山開き　船橋　中嶋久登

404 磐座のなめくじの跡光りたる

405 万象へ天中の暑さ押し込めし

406 穏やかに元安川や広島忌

407 校庭の白線揺らぐ炎暑かな　横浜　榎本文代

408 みかん色の月上げ烏瓜の花

409 ばたばたと卓袱台たたみ夜の秋

410 ピアノ拭く一音づつに涼新た

411 万歳の門付待つや米一升　柏　鹿毛満子

412 かけ声の校庭まはる立夏かな

413 残り田に南瓜の花の這ひまはる

414 一人居の雨の音汲む新茶かな

415 ボスッと来てドンと散り行く大花火　札幌　落合裕子

416 七夕や亡き夫の待つ予約席

417 海霧の町沖より汽笛ふくらみ来

418 次つぎと明けの隊列雁帰る

419 日焼けの子雲の高きへフリスビー　那覇　中本　清

420 沢藤に少し開けおく夜の玻璃戸

421 芭蕉布の小袖や首里の案内人
422 海亀の首夕波にのびきつて
423 山峡の老木影や舞茸舞う 白山 鶴尾正江
424 突然なる車窓に響く秋の雷
425 朝顔の折目しずかに色多彩
426 澄み渡るみ空に銀河悠然と
427 異国語の行き交ふ城下七夕さん 仙台 富田洋子
428 飾り待つ七夕竹の伊達つぶり
429 畳みたる反古に墨の香夜の秋
430 文学館に宮城野萩の咲きしかな
431 吹かれ行く法衣涼しや切通し 金沢 松下信子
432 校庭に隣る一枚早稲実る
433 秋晴れや気球次ぎ次ぎ高く高く
434 星月夜曜変天目眼裏に
435 樒の花盛り上がりたる四方の山 掛川 鈴木美由紀
436 葉桜の被さる土手を夕日差す
437 風蘭を火袋に生ふ石灯籠
438 襟巻や母の好みの真知子巻
439 干し並ぶ夏シャツ見れば子が二人 那覇 辺野喜宝来
440 売上帳に酷暑つづきと記す

441 ただひとり灯を点す水無月終る
442 雲生みて海光歪み敗戦忌
443 蟻の道童子の墓の前静か 横浜 岡 元枝
444 馬鈴薯の花の盛りや駅近し
445 若き日のアルバム捲る夜長かな
446 雲の間の澄みし青空雪の果て
447 猛暑の電車かさかさの新聞紙 横浜 星野信子
448 朝の庭蜘蛛の巣払ふ竹箒
449 行合に挨拶交はす登山道
450 蜜豆の寒天雨の窓烟る
451 花がつおふはふは引きて蟻の列 静岡 石川裕子
452 蟬時雨朝の無人の体育館
453 老いふたり会話の増えてソーダ水
454 新しき家の増えたり精霊路
455 阿寒湖は鏡となりし夏の雲 徳島 山本瑤子
456 暫くは雲と遊びし梅雨の月
457 病む母の傍らいつもソーダ水
458 我住処欅三本蟬数多
459 夕顔や夕ざりを待ち風を待ち 横浜 三木豊子
460 青貝の螺鈿の衆夏点前

461 茅葺きの夏炉を燻し民家園
462 廻廊を素足でめぐり法話かな
463 郭公や落葉松林初デート　金沢　今越みち子
464 縄文の遺跡に試す麻衣
465 宍道湖のしじみ大粒暑気払ひ
466 くちなはのすべる築山苔褥ふ
467 星屑か夜半にも香る金木犀　東京　長谷川信也
468 堂塔の黄金の輝やき涼新た
469 コスモスの蕊離さじと蜆蝶
470 天皇の御園の御休所清楚菊日和
471 山車蔵へまづ長老の集まり来　射水　成瀬真紀子
472 ふくらはぎの肉盛り上がり山車動く
473 土用しじみ出雲の砂を少し吐き
474 梅雨の蝶去りて重たき風残る
475 手拍子を合はせ踊の輪の中へ　佐倉　三屋英俊
476 おけさ節藍の浴衣の逆男波
477 島をどり流人名残の目深笠
478 猿股の奴踊や女伊達
479 祭獅子の群衆に居て老い進む　金沢　杉本年虹
480 ブロンズの裸婦立ちつくす花の冷え

481 さりさりとみぞれ崩して恋ひ話
482 純子忌の主宰と見入る来迎図
483 退院や初鮎跳ぬるをんな川　金沢　新出祐子
484 温泉やおんぼらあつと油蟬
485 ほろほろとまたたき消えし花火かな
486 聞きほれる朝の鳥語に河鹿次ぎ
487 紅花や甕にどつさり茂吉館　酒々井　竹澤竹里
488 草庵の紅一点なり山桜桃の実
489 待宵草黒猫じやれる海鹿島
490 キウイ成るビルの谷間の喫茶店
491 人混みを空色の風春ショール　武蔵野　砂地宏子
492 御仏の裳裾の流れ春兆す
493 掌の小さき蚕や命満つ
494 列長しペンキのにほふボート小屋
495 悴む手包みし母の大きな掌　那珂川　髙山ひさ子
496 箱の雛かしぐ冠にび色に
497 山笑ふブギウギ歌ふおさげの子
498 前方に猿の横切る筍山
499 土佐弁の兄弟げんか帰省の子　小松島　田上幸子
500 碓かめてガラス風鈴仕舞ひけり

501 金亀子投ぐ闇より羽音帰りくる
502 生身魂健康寿命褒めらるる
503 恋人はＡＩロボット万愚節 静岡 小川明美
504 義元を修す木遣の声涼し
505 数千の蟻列なして長の家
506 田植機の方向転換雪士に雪
507 文字摺草くひぜの洞を上りつめ 東京 江見悦子
508 港這ふ烟や花火果つる闇
509 山畑の赤土を盛る鹿の墓
510 薄藍や肩やはらかに能登上布
511 ミニトマト頬張る畑の夕明かり 金沢 田上ナツ子
512 渓流の音上り来る葛の花
513 採り落し胡瓜一夜の雨しづく
514 手習ひの墨芳しき夏座敷
515 烏瓜の咲きざま見つむ夜の卓 加須 茂木弘子
516 釈迦堂に経板見上げ夏終る
517 高原のこんにやく畑雲の峰
518 神域へ喪の身の遠慮梅三分 新潟 髙橋ひろ
519 小盃ほどの蜂の巣日々晴るる
520 地虫鳴く滅多に開けぬ勝手口

521 一呼吸分初蟬に手が休む
522 真四角に足場の区切る夏の空 津幡 河原昭子
523 鍵掛けぬ在所でありき蟬しぐれ
524 わが心のリモコン欲しき秋初め
525 梨売りや戸板一枚店として
526 メロン切る弓張月に三日月に 横浜 小林愛子
527 利き腕の傷あたらしき晩夏かな
528 月明やなじみの守宮とびこんで
529 鯖缶のカレーの辛し大南風
530 鷹乃ち学習す登呂田に画す富士の山 静岡 飯田優子
531 朝シャンの毛先の雫秋日射す
532 秋時雨鞘堂の礎の枘外る
533 法難仏胴生す苔に秋来る
534 マンションに祭り太鼓の舛かな 宮崎 中山　宣
535 三味の音朱夏に流るる象の檻
536 小栗(さざぐり)の一つ笑み割れ落つる音
537 身をむすび死して美し秋の蛇 日野 喜多尾明子
538 帰り来てひとり泳げる夜の川
539 文字小さき昭和の全集夜の秋
540 遠雷や野外劇場幕上る

541 白日輪母誕生日広島忌　千葉　田中道江
542 滴りや光つづきて苔の中
543 梅雨の蝶湯滝光の粒まける
544 闇無音月下美人のひらきそむ
545 隠れては人を見てゐる青蛙　佐野　島田和枝
546 廃校の金次郎一人夏休み
547 びくりとも山動かざる暑さかな
548 大夕焼鉄路一筋ゴビ砂漠
549 巣づくりの雀一喝用務員　佐野　阿部　澄
550 十人に分けても余るはやと瓜
551 補聴器にちんちろりんと虫の声
552 尾の切れし蜥蜴を囲む蜥蜴どち
553 表裏ハンカチ折りて額ぬぐう　東京　齊藤孝夫
554 夏期講座アロハの柄は角の席
555 石切り場手拭い浸す山清水
556 マンホール左右に揺れて夏出水
557 火の玉の砕けるごとし雷走る　福岡　宮田千恵子
558 通夜参り汗にはりつく真珠かな
559 炎昼やリハビリ棟にピヤノの音
560 梅雨に入る壁に掛けある簔と笠
561 四つに組み蜥蜴尾を打つ砦跡　金沢　豊田高子
562 指笛や花野の牛の立ち上がる
563 秋の野や腹這ふ乳牛肚震へ
564 卻して瀬の闇ふくる河鹿笛
565 浴衣着て親子手つなぎ散歩道　国立　山口孝治
566 縁側の一升塩にすすきの穂
567 搗きあげし餅丸むる子白きかな
568 夏草やかつて軍靴の踏みし跡　四街道　塗木翠雲
569 案山子かと見ればすたすた歩き出す
570 八月や青き地球の沸騰す
571 麦秋やケーキふつくら焼き上がる
572 渋澤の経済新た蟬の鳴く　佐倉　新谷八郎
573 宇宙への夢を忘れじ花石榴
574 火取虫寄らぬようにと灯を落とし　札幌　土門　一
575 真昼間ビール3杯大ジョッキ
576 片陰を選んで歩く通院路
577 空腹で鰻の予約もどかしく
578 神歌や阿波岐ヶ原に秋の色　宮崎　中山芳教
579 神楽鈴舞ふ奉仕者や神楽宿
580 秋寂びて伊邪那美の悲話記紀歌謡

581 篝火の誘ふ村道神楽歌

582 朝勤行終へしうなじに汗流る 静岡 髙橋一夫

583 大南風乗る鷗の子親を追ふ

584 脂濃き焼肉の後トマト喰む 札幌 土門一平

585 近所の子と一緒に見てる土用の芽

586 年一度大叔父忍ぶ墓参り

587 冷麺にひと匙半の酢を効かす

588 海月群る二度寝の夢の淡きかな 松戸 渡部洋子

589 遠花火仕舞の音の賑やかに

590 悉く夏木を伐りて庭了ひ 札幌 谷 廣司

591 火を点けて供へし煙草蟬しぐれ

592 張付きし夕焼けの赫や北の海

593 虫微か暗きを選りぬ帰り道

594 峡谷の滝に名を乗せ登山道 札幌 田邊政代

595 増水に命のスクラム沢登り

596 山頂やケルンに捧ぐ夏の月

597 幌尻の山懐に罷の子

598 鶏頭花何か怒つてゐるやうな 静岡 加山ひさ子

599 駅までの道は緩やか夜鷹鳴く

600 ドアノブに残る指紋やそぞろ寒

601 千幹の竹の戦ぎや初嵐

602 民謡もロックもあり盆踊り 東京 松井宣夫

603 売店の軒先飾るアイスの字

604 魂の重さも失くし空蟬や

605 除草剤あわて飛び出す子かまきり

606 流星を仰ぎて祈る病む身かな 船橋 宮本加津代

607 脳裏には当時七歳原爆忌

608 息づかひ手に取るやうに秋の蝶

609 たちまちに和してひとつや蟬時雨

610 日盛の鴉ざりがに突きをり 東京 三村紀子

611 外つ国の長き手足や貸し浴衣 燕 渡辺志ま

612 立秋や暁に飲むヨーグルト

613 蛇行する大河の上を天の川

614 朝顔の萎み媼の口小さし

615 景気良き音の弾け来遠花火 東京 安藤美酒々

616 西瓜にはゾーリンゲンより和包丁

617 蝉音の機影消え行く雲の峰

618 敗戦日手枷足枷尾を引けり

619 仰向けの蟬に一と声掛けにけり 松戸 石川幸子

620 百日紅子猫抱きしむ女の子

621 八月や待たる九月の海の色
622 背伸びしつ朝顔の白数へける
623 立秋の風に紛れてほうほけきよ　船橋　片桐帆一
624 盆路を熊除けの鈴腰に下げ
625 天仰ぐ往生蟬の七日かな
626 応援の少女汗ばむうす化粧
627 サイレンの十一時二分原爆忌　長崎　丸本祥夫
628 低山の囲む港のペーロン走
629 四ヶ月前よりくんち稽古かな
630 地を出でて大地枕に蟬往生
631 かの夏を沸かせし投手始球式　東京　中澤桃子
632 門前の客待つ力車秋立つ日
633 台風来大提灯の畳まれぬ
634 夕虹や高層ビルを跨ぎけり
635 夏草や砲台跡の赤き土　酒々井　小林あけみ
636 終戦日馬穴の水の熱きほど
637 橋に来て川見てゐたり終戦日
638 桟橋の朽ちゆく先や波涼し
639 蟬しぐれ潮風抜くる切通し　横浜　西本才子
640 艚網に青鯊魚を銜へ来し
641 八月の句会塩飴たまはりぬ
642 黒鯛釣荒磯に一人竿垂らす
643 月見豆幼き子にてむかれをり　金沢　北野陽子
644 幼な子の線香花火我も手に
645 流れ星幼な子が見つけをり
646 天の川幼な子が指をさす
647 糸瓜咲く子規庵は休庵中　東京　大場八朗
648 背に猛暑たつねし子規庵無人なり
649 夏期中子規庵となりに笹の雪
650 秋においで根岸名物四会館
651 目交ひに男体山やカヌー止め　栃木　上岡佳子
652 中禅寺湖舳先離れぬ赤とんぼ
653 片虹の脚を抱くや大欅
654 菩提寺や早稲の穂波の耀へる
655 姥捨に立ち往生の厄日かな　東京　名和政代
656 善光寺宿坊で食む走り蕎麦
657 秋遍路浮世絵の里立ち寄りぬ
658 黒塗りの灯台と舟赤蜻蛉
659 赫々と破裂しさうな梅雨満月　柏　内田郁代
660 真昼間の黙の中より黒揚羽

661 長崎忌永井博士の詩今に
662 真白なる白百日紅純子の忌
663 マーガレットのやうな少女ら夏服に　松田　古谷悠紀子
664 真向かひに富士屹然と夏始め
665 補聴器の説明聞くやほととぎす
666 秋立つや小犬の鼻の乾きをり
667 薪割りの響く農場大夕焼　東京　岡村純子
668 長き夜の風のささやき一人聞く
669 遠き日のドラム缶風呂星流る
670 通し土間母の椅子より虫の声
671 アガラサーてふ菓子ふくふくと旧盆来　那覇　大湾宗弘
672 ガジマルの鬚にからまる蛇の衣
673 向日葵の影の暗さよ巨花仰ぐ
674 倒されて向日葵大地に散らす種
675 釣の宿越後訛の鮎談義　静岡　杉田義則
676 宗祇忌や水こんこんと水船に
677 峰の陽に帰燕の空の青さかな
678 ペリー碑へ海光引ける晩夏かな　那覇　大城末治
679 咲き残る蓮へ風立つ朝かな
680 蓮の実の弾けて冥き穴八つ
681 オランダ墓に造花褪せたる残暑かな
682 光る背を見せて隠るる蜥蜴の子　横浜　大橋雅子
683 灰青の塩蜻蛉群る浄土池
684 珊瑚樹や房のごとき実空高く
685 大きな魚青鷺首を振りて呑み
686 蛇口より洩るる水音原爆忌　佐倉　内海良大
687 ダリの絵のやうに炎暑をぐつたりす
688 山襞の色むらさきに涼新た
689 馬の背の藁屑とばす風爽か
690 手花火の後ろの闇の深かりき　志木　中村千久
691 どろどろと下座の太鼓や夏芝居
692 登校の列に日傘の子がひとり
693 かなかなや妻籠の宿の細格子
694 避難場所子へ知らせたる熱帯夜　東京　草間三香子
695 我が丈を越えし一叢夏蓬
696 握りたき父の手沖縄忌に遠く　那覇　稲嶺有晃
697 夕立くる気配に風の匂ひけり
698 説明がしどろもどろで枇杷を剝く
699 歳月や麻服にあたらしき皺
700 白地着て銀座ティファニーのぞきけり　佐倉　内海保子

701 鳩居堂の匂ひ袋に秋きざす
702 筑波嶺の芯まで晴れて豊の秋
703 立秋の沼の匂ひの新たなる
704 猪目窓正座して見る作り滝 佐野 増田幸子
705 青き嶺を借景として古刹かな
706 老鶯や釣り師に朝の日のやはら
707 裏川の風を枕に熱帯夜
708 七月尽額に日の丸付けて馬 横浜 大駒泰子
709 台風のメダルの如く並びをる
710 バス停の身を寄せ合ひて片陰り
711 夏の果空き家を草が呑み込みぬ
712 白樺峠の空の青さや鷹帰る 町田 広瀬俊雄
713 目黄寺の風鐸わびし木歩の忌
714 スカイツリー影の長きや秋の川
715 駅前の路地にからむや凌霄花

※作品につきましては、漢字等の表記を「万象」誌の基準に則って修正した他は、応募作品をそのまま掲載致しました。

※大会作品集の取り纏め
千葉県支部：沢辺たけし　内田郁代　穂苅照子

御礼とご挨拶

令和6年度「万象」全国俳句大会の大会作品には、全国から今年も多数の作品が寄せられましたことを、編集部としても大会実行委員会としても喜びました。応募された皆さまには、改めて感謝申し上げる次第です。

以前は大会作品集として冊子にまとめていたものを、「万象」誌の巻末に掲載をするように致しました。過去2年間は北海道支部、東京支部の皆さんのご尽力を頂きましたが、本年は千葉県支部に全面的なご協力をいただくことが出来ました。支部長として作業の一切をとりまとめ、印刷所とのやりとりもお引き受けいただいた沢辺たけしさん、投句のまとめや校正作業に多大な時間と労力を費やしてくださった内田郁代さん、穂苅照子さんには改めて深く御礼を申し上げます。

作品につきましては、漢字等の表記を「万象」誌の基準に則って修正した他は、公平を期すために、応募作品をそのまま掲載していただきました。

選に当たり、選評をお書きいただいた要路の選者の皆さまにもこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

「万象」編集長　大会実行委員長

中村千久

（←この線より切り取ってください）

万象作品

令和七年

三　月　号

（十二月十五日締切）

都または市・町・村名	
姓　号	（ふりがな）
	年齢

（句の表記は歴史的かなづかいで）（＊の枠内には何も書かないでください）

＊	＊	＊	＊	＊

10月1日より
110円切手を
貼ってください

939-0364

射水市南太閤山13－24

万象作品投句係 行

氏名	住所

〈通信欄〉

編集後記

▽本稿を書いているのは9月17日で今日が十五夜。そして明後日の19日は子規忌。〈子規逝くや十七日の月明に〉という虚子の句から分かるように、子規の亡くなった夜には十七夜の月があったのです。今年は明治35年と同じ月の巡りになりました。二つの月を楽しみます。（いささか旧聞。）（千久）

▽記録ずくめの暑い夏を経て、今年も無事に全国俳句大会を開催することが出来ました。大会出席者の方は会場で本誌を手にされていることと思います。巻末の大会作品集の編集を担当された千葉県支部の皆様、ありがとうございました。36ページにご紹介した今年度の新同人5名の方には、一層のご活躍を期待して止みません。（規子）

▽「残暑バテ」という聞きなれぬ言葉を今年は度度耳にした。秋は夏の疲れをとりつつ冬場に向けて生命力を蓄える季節であるとか。何時になったらその本物の秋がやって来るのか。10月28日の「万象」全国俳句大会の頃には本物の秋になっていることを願うばかりである。（美穂子）

▽子供ホスピスの子供たちは「ただ、その日、その瞬間のことを『ああ、楽しかった』とだけ言って別れるのです。」今年9月1日に脳腫瘍のため56歳で死去したノンフィクション作家、佐々涼子さんのエッセイ『夜明けを待つ』の後書きは続く。「今日は私も次の約束はせずこう言って別れることにしよう。『ああ楽しかった』と。」私は俳句で何度「ああ楽しかった」と言えるだろうか。（宏子）

▽あるボランティア団体の43周年行事の実行委員になった。その内容は「落語鑑賞と老舗の鰻」という企画。場所は橘屋圓蔵邸、我が家から徒歩1分。役所の担当者から「貸し切りOKですが、料金規定がないので無料、落語家は紹介します」とのこと。鰻屋の店主も「圓蔵さんにはお世話になったからなあ」と貸し切りOK。こんなにうまく進むとは！（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284－0015　四街道市千代田1－7－10

塗木翠雲

万象　十一月号

第二十三巻　第八号

通巻　第二七二号

令和六年十一月一日　発行

主宰　江見悦子

発行人　江見悦子

編集人　中村千久

〒168－0072

東京都杉並区高井戸東一－三一－六－603

万象発行所

☎〇三－六三二四－五七九六

印刷・株式会社ダイワクリエイト（☎ 03-3267-2125）

万象　第二十三巻　第八号（通巻二七二号）
平成十四年十一月十三日　第三種郵便物認可
令和六年十一月一日発行（毎月一回一日発行）